

漢文指導のささやかなヒント

塚田勝郎 つかだ かつろう

(元筑波大学附属高等学校)

四七年間の漢文教師生活を振り返り、成功と失敗から得た教訓の一端をお示しします。紙幅の関係により、話題を漢字・熟語指導の一点に絞ることをお許しください。

「今日の漢字・熟語」を使った授業始め

私が教壇に立った三校では、授業は週番や日直の「起立、礼、着席」の号令で始まるのが通例でした。しかし、五〇歳を過ぎてから、この形式に違和感を持ち始めました。「礼」に則っているにもかかわらず、緊張感が生まれません。

そこで、私の授業に限っては号令を廃止することにしました。教壇に立った私が、授業開始のチャイムと同時に「おはよう」あるいは「こんにちわ」と発声し、生徒が着席の状態ですぐにそれに応える。このスタイルに変えてから、授業開始時のだらけた数分間が解消できたように振り返っています。

同時に取り入れたのが、「今日の漢字・熟語」の提示です。漢字一字または熟語一語を大きく板書し、その漢字の成り立

ちや意味、熟語の背景などについて、五分ほど話し、時には生徒に考えさせたりします。

たとえば九月九日なら、「重陽」の由来を。菊の節句にちなんで、「菊」には訓読みがない理由を類推させてもよいでしょう。七月七日なら、「七夕」を「たなばた」と読む背景について、という具合に話題には事欠きません。

漢字・熟語指導の要点

漢文学習の優先順位は、一に漢字と熟語の意味、二に語順、三に慣用表現、四に再読文字、最後に句形・句法——これが私の持論です。漢字・熟語こそ漢文学習の原点なのです。経験から得た漢字・熟語指導の要点を順不同で掲げます。

① 手と頭を使い分けよう

小学生ならいざ知らず、高校生には手で覚える漢字学習は無用とも思えますが、部分的には有効です。「壽」を「さむ

らい(土)／ふえ(フエ) ふく／いちいんち(一吋)」と覚えるのが、その例です。「怒濤」「祈禱」を簡易な字体で「怒濤」「祈祷」と書くのは、教育現場では感心しません。

現代では大人も手書きの機会が減っています。しかし、書いたことのない漢字は書けないのが現実です。教師自身が手書きの必要性を再認識する必要があります。

② オリジナルの部首名を作ろう

高等学校の段階では、頭で漢字を覚えることを奨励しましょう。『裕』の部首は衣偏で、示偏ではない。」と説明されても、瞬時に理解できない生徒がいるかもしれません。衣偏と異なり、示偏という部首名は意味を表していないからです。「示(ネ)」を部首とする漢字は、多く神や祭事に関する意味を持ちます。「示偏」を思い切って「神偏」または「祭り偏」と言い換えることで、生徒を納得させられそうです。同様に「ウ冠」を「家冠」、「ノ木偏」を「穀物偏・作物偏」と呼ぶことも可能でしょう。

③ 成り立ちの安易な説明は禁物

「武」の成り立ちを、「戈で止める」と誤って解釈をする人がいまだに見られます。現在発行されている漢和辞典は、どれを見ても「武」を「戈を以て進む」と説明しています。

「止」は足の象形に過ぎません。漢字に興味を持たせようとするあまり、俗説(通俗字解)に頼るのは、きわめて危険です。「絆」も「糸を半分ずつ持つ」ではありません。

④ 成り立ちの説明はときには旧字体で

高等学校段階では旧字体・正字体の学習は必須ではないものの、漢字の成り立ちは、ときには古い字体に戻って考える必要があります。「突」や「臭」の「大」は、「犬」でないと説明が付きません。「抜」の「友」は、実は「友」です。漢和辞典の解字欄に目を向けるよう、常に知らせましょう。

⑤ 国訓の存在を知らせよう

「柏」を柏餅の柏と考えると、「松柏」の語の説明が付きません。「柏」はヒノキやコノテガシワのような常緑の針葉樹ですから、「松」と合わせて人の節操や長寿のたとえになるのです。「桂」「楓」を国訓で「かつら」「かえで」と読んでいては、漢詩・漢文の正確な理解は得られません。

⑥ 書き換えに目を光らせよう

「才」に年齢の意味がないにもかかわらず、「○才」と書くのは小学校の漢字指導の負の遺産です。「世論」が「輿論」の書き換えであることを知れば、「せろん」が本来は誤読で

あることに気づけます。

⑦ 漢文では品詞の概念がフリー

「事」に「つかえる」という意味があることを知らない、「師事」や「事大」の意味が理解できません。「私」に「ひそかに」の意味があることを知ると、「私淑」「私語」の意味が腑に落ちます。漢字の意味は多様で、日本語の感覚で「これは名詞、これは動詞」と決めつけるのはタブーです。

熟語で意味を確認する方法も重要です。「与奪」「与党」

「関与」と並べてみると、「与」に「あたふ（あたえる）」「くみす（くみする）」「あづかる（あずかる）」のように多様な意味があることを実感できます。

⑧ 熟語の訓読は効果大

「地震（地震ふ）」を「地が震える」と訓読している限りは、訓読力の向上は期待できません。漢文の訓読には、語順の認識と古典文法への準拠が求められます。

なお、以上の諸点は、拙著『新人教師のための漢文指導入門講座』と同『高校2・3年生編』で詳細に説明しています。

教師にとって最も怖いのは、生徒に実力を見透かされることでしょう。豊かな漢文の授業を作り上げるには、十分な教

材研究と経験の蓄積が不可欠です。「校務や部活の指導で忙しい」は言い訳にはなりません。授業準備を教師用指導書だけで事足りりませず、関連する書籍で教養を深めたり、学会や研究団体が主催する講座、研究授業などに参加したりすることも、ぜひお考えください。退役漢文教師の切なる願いを述べて、筆を擱きます。

塚田勝郎著『新人教師のための
「高校2・3年生編」も登場！
漢文指導入門講座』



B5判・160ページ
定価 2,420 円
(本体 2,200 円+税 10%)

漢文の授業づくりを徹底サポート！
「誰でも教えられる漢文」をめざし、漢文指導のノウハウをわかりやすく示すテキスト。



B5判・176ページ
定価 3,080 円
(本体 2,800 円+税 10%)

本物の漢文指導力が身につく！
句法・語彙指導をはじめ、学習が進んだ生徒の疑問にこたえる指導力を身につけられる。講義動画・プリントデータ集付。

【Q&A】白楽天にまつわる疑問解決！

Q1 〃9 加藤 敏 (千葉大学名誉教授)

Q10 〃13 上野英二 (成城大学教授)

名と字

Q1 白居易と白楽天は、同じ人物なのですか。

A 同一人物です。「居易」が本名、「楽天」は字。字は元服したときにつけ、日常に用いる呼称です。排行(同族中の同世代の出生順)で「白二十二」とも呼びます。「居易」は、儒教の五経の一つ『礼記』『中庸』の「君子は易きに居りて以て命を俟ち(安らかな立場にあって無理をせず天命にまかせる)、小人は險を行ひて以て幸を徼む(君子居易以俟命、小人行險以徼幸)」に、「楽天」も五経の『易経』『繫辞上』の「天を樂しみ命を知る、故に憂へず(樂天知命、故不憂)」によっています。

【逸話】居ること大いに易からず 白居易が初めて科挙(官吏登用試験)を受けようとした頃、高官で詩人の顧況に自らの詩巻を献じた。最初、顧況は「都是物価が高く、生活が大変だろう(居ること大いに易からざらん(居大不易))」とからかったが、「野火烧けども尽きず、春風吹きて又生ず(野火烧不尽、春風吹

又生)」の句に感動し、「君は天下に居るのになんの困難もないだろう」と称賛した。(宋、王定保『唐摭言』)

生涯と作品

Q2 白居易はどんな一生を送ったのですか？

A 白居易(七二一―八四六)は、鄭州新鄭県(河南省新鄭市)に生まれました。八〇〇年(二九歳)、進士科(官吏登用試験の難関科目)及第。八〇三年(三二歳)に秘書省の校書郎となり、八〇六年(三五歳)には、皇帝の詔による臨時試験に合格。この年「長恨歌」を制作し一躍名声を博しました。八〇七年(三六歳)、翰林学士となり、八〇八年(三七歳)に左拾遺を併任。楊氏と結婚。「新樂府五十首」制作。八一五年(四四歳)、宰相武元衡暗殺事件の真相究明を求める上書を咎められ、江州の司馬(副長官、閑職)に左遷されました。八一六年(四五歳)、「琵琶行」制作。八一七年(四六歳)、廬山の麓に草堂を営み、「香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂

初めて成り、偶東壁に題す」詩制作（↓Q10）。やがて中央に復帰しましたが、八二二年（五一歳）には杭州刺史（長官）に出ました。その後、地方、中央の官吏を歴任し、八四二年（七一歳）、刑部尚書（法務大臣）として退官、八四六年、逝去。その詩文は、友人元稹が『白氏長慶集』五〇巻にまとめ、その後白居易自らが増補を重ね、八四五年（七四歳）に『白氏文集』七五巻が完成しました。

漢字文化圏の宝

Q3 白居易は中国でも人気があったのですか。

A 白居易の作品は、生前から大流行していました。このことは自ら述べていますし、元稹も、宮廷をはじめ寺院や宿場にもで、白居易の詩が書きつけられ、王公、女性、牛飼いの子どもも口ずさみ、伝写され、あるいは版木に彫られていたとあります。新羅の商人が高値で買収求めたこともあり、また新樂府「売炭翁」の書かれた紙片が新疆ウイグル自治区から発見されています。『白氏文集』はわが国にも伝わっており、白居易の作品は、まさに漢字文化圏の宝だったのです。

知己

Q4 白居易に親しい友人はいましたか？

A 白居易の友人のうち、ことに親しかったのは、元稹

（七七九—八三二）、字は微子です。八〇三年、二人は同時に秘書省の校書郎となり、親交を結びました。さらに二人は八〇六年の皇帝による臨時試験に臨み、ともに合格しました。以後、浮沈の多い官僚世界の中で二人の友情は深まりました。応酬の詩作も多いのですが、その中には、「三五夜中新月の色、二千里外故人の心（三五夜中新月色、二千里外故人心）」という、左遷先の元稹を思う名句もあります（八月十五日夜、禁中に独直し、月に対して元九を憶ふ）。また元稹への書簡「元九に与ふる書」は優れた文学論ですが、元稹がいなければ書けなかったでしょう。元稹は文学の友でもあったのです。

元和体

Q5 「元輕白俗」とはどういう意味ですか。

A 「元・白は輕俗」、元稹は輕薄、白居易は平俗だという批評です。白居易は、難解な語句や対句、典故（出典のある故事や字句）などの技巧を駆使せず、平易で誰もが親しめる表現を追究し、元和体と称される新たな漢詩の扉を開いたのです。『逸話』老嫗に読ましむ 白居易は、詩ができると必ず家の老婆に読ませ、意味がわかると、はじめて記録した。彼の詩は、長老が農民に農作業を教えるようなもので、言葉はほとんど日常使われているものだった。（元、辛文房『唐才子伝』）

Q 6 「長恨歌」はどのようにして誕生したのですか。

A 八〇六年、白居易は地方官として盩厔県（陝西省周至県）に赴任しました。楊貴妃が亡くなった馬嵬の地も近くでした。盩厔の町に住む王質夫、陳鴻と連れだって仙遊寺に遊び、ある時、話題が楊貴妃のことに及びました。すると王質夫が白居易に「楊貴妃のことは世にも稀な話であるから、詩才有る君がこの物語を歌にしてくれないか」と頼んだのです。そこで白居易は「長恨歌」を作り、陳鴻にその伝（解釈・注釈）を書かせました。白居易「長恨歌」と陳鴻「長恨歌伝」は併せて『白氏文集』に採録されています。比較読みをすると「長恨歌」をより深く読むことができるでしょう。

兼濟と独善

Q 7 白居易が大切にしていた言葉はありますか。

A 白居易は、「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を済ふ（窮則独善其身、達則兼濟天下）」という言葉の「独善」（志を得ない時は自ら修養する）「兼濟」（榮達すれば天下を救済する）ということを自らのあり方として大切にしています。政策に関わる上書や杭州知事であったときの湖堤の改修と灌漑工事等は「兼濟」ですし、「新樂府五十首」

他、諷諭詩と呼ぶ詩を制作したのもそうです。一方、志を得ない時には足るを知って日々を楽しむことも「独善」とし、その心境を表現した詩には閑適詩と名付けました。

言う者に罪なし

Q 8 諷諭・諷刺の詩がなぜ「兼濟」になるのですか。

A 古代の文学観では、詩歌は人々のさまざまな思いや感情が表現されたものであり、為政者はそうした詩歌を自らの戒めとするときられています。また詩人は人々の心を自らのものとして諷刺、諷諭（遠回しに諭す）する者でした。白居易はこの文学観に基づき、「詩人」として民間の実情や政の問題を詠じた「新樂府五十首」他の風諭の詩を制作し、世の救済を願ったのです。この諷諭詩は『白氏文集』の巻頭に置かれました。わが国では、紫式部が一条天皇の皇后彰子に「新樂府」を進講しています（↓Q10）。

トピック

Q 9 生徒に紹介できる白居易の話題、言葉を教えてください。

A いくつか紹介しましょう。

【話題】天才児 白居易が生まれて七、八か月の頃、乳母が後ろの衝立の「無」と「之」の字を指し示したことがあった。

彼は口には出せなかったが、その二字を覚えてしまい、後に二字について何度試されても誤ることなく指さした。

【言葉】中隠「中隠」と題する詩に言う。大隠は町中に、小隠は山林に隠遁するが、中隠は、閑職の官に隠遁する。閑職だから仕事はなく給料は入る。行楽もできるし、宴席で酒も飲める。門を閉ざせば一人のんびり。貧しいと飢寒に苦しみ、出世すれば心労ばかり。中隠なら安泰だ。

【言葉】詩魔白居易は多作の詩人で、三〇〇〇首に近い詩が現存する。彼は抑えきれない詩作への衝動を「詩魔」と呼んだ。「唯だ詩魔有り降すこと未だ得ず、風月に逢ふ毎に一たび閑吟す（唯有詩魔降未得、每逢風月一閑吟）。仏教に傾倒した晩年、雑念はすっかりなくなつたが、詩作への衝動だけは消すことができないことを詠じた句である。

日本での受容

Q 10 白楽天の作品は、日本で、なぜ、どのように愛されていったのですか。

A 「文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集……」（『徒然草』一三段）。『徒然草』の兼好法師は、「ひとり、灯の下に文を広げて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる」として、白楽天の『白氏文集』を挙げました。彼は『白氏文集』を「見ぬ世の友」として愛読していました。同様の記事

は『枕草子』にも見られます。「文は文集、文選……」（二九八段）。『白氏文集』は、清少納言の愛読書でもあったのです。

古来日本では、四書五経を始め、中国の古典は熱心に読まれましたが、それはいわば政治や道徳の教科書として学ばれたものでした。その中であって、『白氏文集』は、自然な好尚によって愛読されたのでした。

『枕草子』には、雪の降り積もった日、一条天皇の中宮定子が、「清少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」と謎をかけたのに応え、御簾を高く上げて庭の雪をお見せしたというエピソードが綴られています（二八〇段）。これは『白氏文集』巻三「遺愛寺の鐘は枕を欹（そはた）て聴き、香炉峰の雪は簾を撥（か）けて看る」（「香炉峰下、……」↓Q2）に拠ったものでした。紫式部も『源氏物語』須磨巻で、「枕をそぼだてて四方の嵐を聞きたまふに」とこの句を利用しています。いかに白楽天が平安朝の貴族達に親しまれていたか窺えます。

紫式部は、同じ一条天皇の皇后彰子に白楽天の「新樂府」（↓Q8）をお教えしたことをその日記に記していますが、『源氏物語』須磨巻では光源氏に『白氏文集』の「二千里の外故人の心」（八月十五日夜、……）↓Q4」という詩句を口ずさませてもいます。実際、白楽天の詩句は当時好んで歌われてもいました。言わば平安朝のポピュラーソング。それらを集めたソングブック『和漢朗詠集』の大半は、白楽天の詩句で

占められています。白楽天の詩文は、圧倒的な人気を得ていたのです。

日本人の美意識

Q 11 白楽天の詩文は、なぜそれほど愛好を呼んだのですか。

A 白楽天の詩文の愛好は、日本の平安朝の宮廷に始まったことではありません。白楽天の作品は、すでに本国中国において、知識層のみならず民衆に至るまでの、幅広い人気を博していました（↓Q3）。まず、そのわかりやすさ。白楽天の作品は、身近な事柄を民衆にもわかりやすい言葉で、情趣豊かに表現するものであったのです。そして、その繊細さは、日本人の好みにも合ったようです。川端康成はノーベル文学賞受賞記念の講演「美しい日本の私」において、「雪月花の時最も君を憶ふ」ということを、日本人の美意識の特徴として紹介していますが、これは実は『白氏文集』の一句（殷協律に寄す）でした。白楽天の作品が日本人の美意識の形成に影響を与えたことは無論ですが、これはむしろ白楽天と日本人の美意識に通底するところがあり、それが響き合ってより豊かなものになっていったと理解すべきものでしょう。それは白楽天が幼少期を過ごした中国江南の地の温暖な風土が、日本にも通ずるものであったせいかもしれません。

日本文学への影響

Q 12 日本の創作への影響を教えてください。

A 白楽天の作品への愛好は、日本人の文芸の創作をも大いに刺激しました。『新古今和歌集』の歌人藤原定家も歌詠みの心得として、「白氏文集第一第二帙を常に握翫すべし。深く和歌の心に通ず（『詠歌大概』）」と言っています。実際、白楽天の詩文は和歌の詠作をはじめ、日本の文学の創作にも大きな影響を与えています。

もちろん、白楽天は、日本の漢詩文の製作にも多大な影響を残しました。菅原道真の作品は、その代表でしょう。例えば道真は、九州大宰府に左遷されますが、その辛い身の上を詠んだ詩の「都府楼は纔かに瓦の色を見る、観音寺は只だ鐘声を聴く」（「門を出づ」）は先に引用した白楽天の対句（↓Q10）に倣ったものでした（『大鏡』）。これは単に参考にしたということに留まるものではありません。白楽天のこの詩は、やはり彼が左遷された時に詠まれたものでした。道真は自身の境遇を白楽天の人生に重ねていたのです。

『源氏物語』須磨巻の光源氏も同様でした。スキヤンダルのために京都を去った光源氏は、須磨に粗末な住まいを建てて住みますが、これは左遷された白楽天の侘び住まい、草堂をモデルとしています。白楽天はそこで、世俗から離れて俗

事にわずらわされない閑雅な生活をたのしみました。そしてそれを文章に綴りました(『草堂記』等)。これは、風雅な生活にあこがれる文人や隠者、風流人の理想ともなりました。「池亭」での生活をたのしんだ『池亭記』の慶滋保胤、「方丈」の庵を営んだ『方丈記』の鴨長明、「幻住庵」に遊んだ『幻住庵記』の松尾芭蕉…。そして須磨の侘び住まいの光源氏も、その生活を日記に綴ったことが『源氏物語』には記されています。『徒然草』の生まれた場所も、そういう所であつたに違いありません。平安中期の貴族、源頼基は、そうした生活を「罪なくて配所の月を見ばや」と願いました(『発心集』『撰集抄』『徒然草』等)。犯罪による明確な処罰というのではなくて、自ら信じる道を求めて侘しい境遇に身を置いて、かえってその風流をたのしむ。白楽天は、そういう閑居での風雅な生活を実現した理想の人としても、あこがれられるようになったのです。

源氏物語と長恨歌

Q 13 「長恨歌」の影響について教えてください。

A 白楽天の代表作と言えば、唐の玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を歌い上げた一大叙事詩「長恨歌」でしょう。「長恨歌」も、その製作の当時から中国で大流行し、それは日本の平安朝にも及びました。ただ愛読されたばかりではなく、絵に描かれ、

漢詩や和歌に詠まれ、物語にも仕立てられました(『俊頼髄脳』『唐物語』等)。「源氏物語」の首巻桐壺巻が「長恨歌」に基づいて書かれていることもよく知られています。玄宗は光源氏の父桐壺帝に、楊貴妃は母桐壺更衣に移し換えられ、やはり二人の悲恋が描かれます。以下、『源氏物語』は、夕顔(光源氏・夕顔)、葵(光源氏・葵上)、賢木(光源氏・藤壺)、幻(光源氏・紫上)、宿木(薫・大君)、夢浮橋(薫・浮舟)等々、「長恨歌」の変奏を繰り返しながら、その独自性を発揮し、一大傑作となるのです。

なぜ、「長恨歌」はそれほどの愛好を呼んだか。それは、その内容や表現の魅力によることは当然ですが、その一つの鍵として「長恨歌」に、古くから日中に分布する民話の原型があることが考えられます。楊貴妃が温泉浴の後、玄宗の妻となり、霓裳羽衣に彩られつつ、やがてこの世から去って行くその前半は羽衣の話に、海の彼方の世界の楊貴妃を玄宗の使いの男が尋ね、みやげの品(鉾合金釵)と約束のメッセージ(比翼連理)をもらってくる後半は浦島の話に、そしてその全体は、七夕の起源を語る民話に重なるのです。これが、「長恨歌」の人気の秘密であつたと考えられますが、これについては、拙著(上野英二『源氏物語と長恨歌 世界文学の生成』岩波書店)に詳述しました。

【授業実践】『大鏡』道真左遷と白居易

——古文・漢文融合授業 一つの試み

さとうりほこ
佐藤理保子
(長野県長野高等学校)

一 はじめに

新課程の共通必修教科目「言語文化」、選択科目の「古典探究」とともに、学習指導要領で「我が国は中国の文化の受容を繰り返しつつ独自の文化を築き上げてきた。その経緯を踏まえ、古文と漢文の両方を学ぶことを通して、両文化の関係に気付くこと」が指導内容に求められている。

ところが、両科目ともに、授業は「古文」「漢文」を別々に学習する機会が多く、「古文」と「漢文」の関係性や「つながり」を実感できず、そもそもの「漢文」を学ぶのか、気がつくことができない生徒もいるのではないだろうか。

そこで、一年次「言語文化」、二年次の「古典探究」の授業を通して、生徒たちが「古文」のなかに「漢文」が息づいていることを実感できる、古漢融合授業の「一つの試み」を構想し、二年次の最後に『大鏡』『道真左遷』と白居易の漢詩「香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁」をともに学ぶ単元を考えてみたい。

二 授業の構想

(一) 一年次 「言語文化」

① 「漢文」学習の導入単元

「推敲」や「完璧」など、普段使用している言葉（故事成語）の由来となった漢文を読むことで、漢文が日本語に影響を与えてきたことを学び、漢文を学習する動機づけを明確にする。

② 古文と漢詩とともに学ぶ単元

古来、漢文（漢詩）が日本文学にも影響を与えてきたことを学ぶ。

(Ⅰ) 『おくのほそ道』『平泉』と杜甫の「春望」を読む。

「春望」では、玄宗皇帝と楊貴妃の話（安史の乱）を押さえて、次年度に学ぶ白居易「長恨歌」と紫式部『源氏物語』の学習につながりを持たせる。

(Ⅱ) 『枕草子』『雪のいと高う降りたるを』と白居易「香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁」を読む。

『枕草子』のエピソードは、白居易の漢詩が当時広く読まれ、知られていたことを示す。白居易の漢詩を読む際に、その生涯を便覧等で調べ、彼の作品が平安初期から伝来し、菅原道真の漢詩文や『源氏物語』などの文学作品にも多大な影響を与えたことを押さえる。漢詩の鑑賞は、次年度『大鏡』の学習で詳しく行いたいので、ここでは、プリント等で現代語訳を紹介し、共有する。

(二) 二年次 「古典探究」

① 古文『源氏物語』『光源氏の誕生』と漢詩「長恨歌」を読む。

読み比べを通して、「長恨歌」が『源氏物語』に多大な影響を与えたことを学ぶ。

② 漢文『史記』『項王の最期』と古文『平家物語』『木曾の最期』の比べ読み

司馬遷が生み出した個人に焦点を当てる「紀伝体」の特色を学び、『平家物語』『木曾の最期』と「項王の最期」を読み比べ、『史記』から受けた影響を考える。

③ 古文『大鏡』『道真左遷』と白居易の漢詩を読む。

『史記』で学んだ「紀伝体」が『大鏡』でも用いられていることを踏まえ、「道真左遷」を読む。次項で詳述する。

三 『大鏡』『道真左遷』の学習

第一時 菅原道真について知る

菅原道真について知っていることをグループで発言し合い、さらに便覧等で調べて、発表し合い、クラスで共有する。「学問の神様」という言葉や、修学旅行などで太宰府天満宮や北野天満宮、湯島天神を参拝した経験なども引き出せたらよい。

第二時～第三時 「道真左遷」の読解

次の二つの段落に分けて読む

第一段落

- ・ 道真の左遷の経緯とその子女の配流
- ・ 和歌と漢詩から道真の心情を読み取る

第二段落

- ・ 筑紫での謹慎生活

- ・ 大宰府での道真の心情がわかる漢詩を読む

第四時～五時 大宰府における道真の心情理解を深める学習活動

① 菅原道真の漢詩「不出門」を読む。

『大鏡』に第三句・四句のみ引用されている「不出門」の全文を読む活動を行い、道真の心情をより深く理解させたい。学習活動として、ワークシートを使用した調べ学習、グループワークを行う。なお、この漢詩の第五・六句は、柳澤良一が『菅家後集の研究』（汲古書院）で指摘しているように解釈が多様で、生徒たち自身での読解が困難であ

ると考えられるので、あらかじめ現代語訳を示しておいた方がよいと判断した。現代語訳は『日本古典文学大系 菅家文章・菅家後集』（岩波書店）により、一部改めた。

②道真が「不出門」を詠む際に踏まえた白居易「香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁」を読む。

一年次の『枕草子』の学習を振り返り、現代語訳に取り組む。（ワークシート・下段）

③①②の活動を踏まえて、ワークシートを使用したグループワーク、話し合い活動で、道真と白居易の漢詩から二人の境遇と心情を比較するとともに、「道真左遷」で「昔の博士ども」が、道真が白居易よりも漢詩を「まさざまに作らしめたまへり」（さらにまさって作りなされた）と評価した理由を考えさせる。

〔指導上の留意点〕

道真は大宰府左遷となる前年、自身の漢詩集『菅家文章』を醍醐天皇に献上し、天皇から白居易よりも道真の漢詩の方が優れているから今後は『白氏文集』を開くことはないという内容の漢詩を下賜されたことが誇りであった。大宰府にも『白氏文集』を持参するほど（『菅家後集』）、白居易になれ親しみ、その漢詩に精通していた道真は、同じ左遷の経験をした白居易に自分自身を重ねたと思われる。白居易は「司馬」、道真は「大宰^{だざい}権帥^{ごんすい}」、どちらも政務に関与しない左遷のた

【左遷】「道真左遷」
大宰府における道真

一、道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。
二、道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。
三、道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。

ワークシート

一、道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。
二、道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。
三、道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。

道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。

道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。

道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。

道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。

道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。

道真の漢詩と白居易の漢詩を比較しよう。

ワークシート「大宰府における道真」

めの閑職であった。道真は、断ち切るこのできない都への思いを抱えた自分と、左遷の身にありながらも悠々自適な心境で「長安だけが帰る故郷ではない」と詠んだ白居易との大きな違いに思い至った時愕然とし、絶望的な気持ちにもなったのではないだろうか。住まいに引きこもりながらも美しい香炉峰を眺め、遺愛寺の鐘の音ものんびり余裕を持つて楽しんだ白居易に対して、自分は住まいに蟄居し、自身を監視するかのような都府樓の瓦を眺めるだけ、天下三戒壇としても高名な観世音寺に出かけていくこともできずにその鐘の音を聴くだけであると。

道真が、白居易の詩を踏まえ、自身との対比を鮮やかに詩に詠んだ点が博士たちに高く評価されたことを生徒たちと読み味わいたい。「古典探究」の学習指導要領で指導が求められている「漢詩もまた我が国で愛好され、優れた漢詩が数多く作られてきたこと」も十分に学ぶことができよう。

道真が「不出門」を詠んで約百年後、正暦四年（九九三年）頃に『枕草子』『雪のいと高う降りたるに』のエピソードがある。その二年後、長徳二年（九九五年）に中宮定子の兄伊周これちかも大宰権帥として左遷されることになる。後年、清少納言はこの雪の日のことをどのような気持ちで振り返ったのか、想像してみるのも興味深いのではないだろうか。

四 おわりに

以上のように、古文と漢文のつながりを意識した古漢融合授業を通して、生徒たちに古文にも漢文にも親しみを持つて学んでほしいと考えている。

さらに、生徒たちが主体的に古典を学ぶ一助として、生徒に親しみやすい題材の活用も考えられる。「道真左遷」を例にすると、灰原葉の漫画『応天の門』（新潮社）には若き日の道真の姿が描かれ、白梅という召し使う少女に、『白氏文集』の四巻を探して来るように言いつける場面もある（コミック二巻）。直木賞作家澤田瞳子氏の小説『泣くな道真』『吼えろ道真』（集英社）のシリーズには、大宰府での道真の生活が痛快かつユーモラスに描かれている。

また、観世音寺は現存し、ウェブサイトには道真の「不出門」の一節が引用されている。道真が音だけを聞いた梵鐘は、日本最古のものとして国宝に指定され、現在は九州国立博物館に寄託されているという。このような漫画、小説、エピソードなどを紹介することを通して、古文・漢文の世界がより身近なものになる授業を今後も心がけていきたい。

【授業実践】「引詩」の効果を実感する

——『源氏物語』須磨巻の授業

（啓明学園中学校高等学校）

福田 健太
ふくだ けんた

『源氏物語』須磨巻「須磨には、いとど心づくしの秋風に」とはじまる一段を授業で扱う時、まず目を引かれるのは、引歌や引詩の多さではなからうか。古歌や漢詩の一節を織りこむ引歌や引詩は、重層的な味わいや余情を生むが、生徒にとっては「ただ注釈が多いばかりで煩わしい」といった印象で終わりがかねない。しかしこれらは、当時の人々が共有していた古典の知識に基づく連想を誘うという点で、和歌における本歌取りや縁語などの修辞とも通ずる古典に特徴的な表現であり、それを味わうことは古典の醍醐味の一つでもある。そこで授業では、あえて卑近な「伏線回収」にもなぞらえて、生徒にその連想を体験させたい。

なお白居易と『源氏物語』といえば、「長恨歌」との内容の関連が浮かぶかもしれないが、今回はまずより具体的な白居易の詩句の引用をおして彼の日本文学への影響を考える。

一 引歌、引詩の説明——「秋雁櫓声来たる」

はじめに、授業では本文の現代語訳と並行し、引歌や引詩とは何かを説明する。類想や慣用表現との厳密な区別はせず、教科書の注を示しながら、「木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋は来にけり」「旅人はたもと涼しくなりにけり関、吹き越ゆる須磨の浦風」「ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり」といった和歌の言葉が本文に用いられ、場面の印象を作っていると伝える。「枕をそばたてて」という表現についても、「遺愛寺の鐘は枕を欹てて、聴き」という詩句を含む白氏文集卷一六「香炉峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶東壁に題す」第四首を掲げ、都を離れているという共通点を生徒に探させたい。

さて本文を読み進めると、

沖より舟どもの歌ひののしりてこぎ行くなども聞こゆ。
ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも、心
細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへるを、

うちながめたまひて、涙のこぼるるを……

とあるが、ここで「なぜ雁が舟の楫の音のように鳴きながら飛んでいるのを見て泣くのか」と問いかける。ここが一つめの勘所である。生徒達は「雁の声がさびしげで切なくなる」「遠くに小さく見える舟や雁の姿が自分の人生のはかなさに重なる」などと答えるかもしれない。それらはきつと誤つておらず、前者のような答えには例えば

うきことを思ひつらねてかりがねのなきこそわたれ秋の

夜な夜な

(古今和歌集 秋上 凡河内躬恒)

を、また後者には

世の中を何に喩へむ朝開き漕ぎ去にし舟の跡なきごとし

(万葉集 卷三 沙弥満誓)

などの詩歌を示して、その答えが伝統的発想であると褒めることもできる。しかしその上で、あくまで「雁が舟の楫の音のように鳴く」のを見て涙することにこだわらせてみたい。

生徒はなお色々な発想をしてくれようが、それも尽きたという頃あいに、白氏文集卷五四「河亭晴望」

風転じ雲頭斂まり 烟銷えて水面開く

晴虹橋影出で 秋雁櫓声来たる

郡静まりて官初めて罷む 郷遥かに信未だ廻らず

明朝は是れ重九 誰か菊花の盃を勧めん

を現代語訳とともに示す。すると、故郷を離れた孤独に泣い

ていることが見えてくる。このように読んでゆくとおそらく「源氏が雁の声を聞いてこの詩を思い出し、詩が自身の孤独に重なって嘆いた」と理解する生徒が現れよう。もちろんそのようにも解釈できる。だがここでは、源氏が詩を思い出したかどうかというよりも、書き手が「雁の連ねて鳴く声、楫の音にまがへる」という表現をしたことにより、「河亭晴望」を介して、読み手の胸裏に離郷の孤独が浮かぶということを引詩の効果として生徒に理解してほしい。

二 引詩の体験——「二千里の外故人の心」

雁の歌の唱和を経て、「月のいとはなやかにさし出でたるに」と語り出される。ここからが今回の肝である。「『今宵は十五夜なりけり。』とおぼし出でて」とまで読んだところで本文を隠し、「源氏はここでどのような心情になったろうか」と聞いてみる。生徒は「月の美しさに少し心が慰んだ」「かぐや姫のように都へ帰りたくなった」「紫の上も同じ月を見ていることだろうと思った」など色々な答えを考えるのではない。その上で「源氏はここで漢詩の一節を唱えた。どの詩だろうか」と問いかけながら、例えば次のような月の詠みこまれた漢詩とその訳を載せたプリントを配る。

A 独り座す幽篁の裏 琴を弾じ復た長嘯す

深林人知らず 明月来たりて相照らす(王維「竹里館」)

B 牀前月光を見る 疑ふらくは是れ地上の霜かと

頭を挙げて山月を望み 頭を低れて故郷を思ふ

(李白「静夜思」)

C 今夜鄜州の月 閨中只だ独り看るらん

遙かに憐れむ小兒女の 未だ長安を憶ふを解せざるを

香霧雲鬟湿ひ 清輝玉臂寒からん

何れの時か虚幌に倚り 双び照らされて涙痕乾かん

(杜甫「月夜」)

D 銀台金闕夕べ沈沈 独宿相思翰林に在り

三五夜中新月の色 二千里外翰林の心

渚宮の東面煙波冷ややかに 浴殿の西頭鐘漏深し

猶ほ恐る清光同じくは見ざらんことを

江陵は卑湿にして秋陰足る

E (白氏文集卷一四「八月十五日夜禁中独直对月憶元九」)

昔年八月十五夜 曲江の池畔杏園の辺

今年八月十五夜 湓浦の沙頭水館の前

西北郷を望むも何れの処か是なる

東南月を見て幾廻か円かなる

風に臨んで一たび嘆ずるも人の会する無し

今夜の清光往年に似たり

(白氏文集卷一七「八月十五日夜湓亭望月」)

選ぶかもしれない。本文の「琴を少しき鳴らしたまへるが……とうたひたまへるに」もAの「琴を弾じ復た長嘯す」に重なる。

これに對して「源氏はここまで度々、都にいる愛しい人々を恋しがって泣いており、いくら月が美しいといつてもAの詩のように清々しい心情にはならないはずだ」という反論も出よう。遠くにいる大切な人と思う詩はCと正解のDだが、友人を思うDを選ぶよりもむしろ「源氏が恋しく思っているのは紫の上をはじめとする女性達だから、妻を思うCがふさわしい」という意見が、おそらく賛同を集める。

これらCやDを推す意見に對しても「この両首はいずれも自分が都にいて相手が遠くにいるが、源氏は鄙にいて都を恋しがっており、『故郷を思ふ』というBや『曲江の池畔杏園の辺』と都の景色を懐かしむEがふさわしい」という反論がありうる。これを検討することにより、「源氏が恋うているのは愛しい女性達か華やかな都か」という議論をとおして、本文の主題を探りながら読解が深まることも期待される。

いずれにせよ、ここでは漢詩の言葉借りて感情を表現することを体験してほしい。

ところでここがほかの句でもよかったとは言いきれない、ということも続けて考えたい。本文を読んでゆくと「霧や隔つる」という賢木巻の藤壺の歌が現れる。これはDの「江陵

は曇りがちで月が見えていないかもしれない」というところから、「月が霧に隔てられている」という藤壺の歌を連想したと考えられる。「二千里の外故人の心」の句が伏線となり藤壺への思慕が描かれている。

つまりこの段には、「心づくしの秋」↓月／十五夜↓「三
五夜中の新月の色 二千里の外故人の心……秋陰足る」↓
「霧や隔つる」という連想が、和歌や漢詩の言葉によってはりめぐらされている。

三 古典の伏線回収——「おくと見るほどぞはかなき」

今述べた連想には、強引なところもあるかもしれない。それでもあえてこのような説明をしようと思うのは、言葉をと
おした古歌や漢籍への連想、また縁語の技法に見られるほか
の言葉へのつながりが、古典の面白さの一つだからだ。そしてこれは高校生にも実感しやすい面白さだろう。その感覚は彼らもよく言う映画やドラマの伏線回収に少し似ている。

白居易との関係から外れてしまうが、伏線回収になぞらえた読解の授業にもふれておく。『源氏物語』御法巻「風すごく吹き出でたる夕暮れに」という紫の上の臨終の場面に、紫の上、明石の中宮、源氏の唱和があり、その三首には「露」という言葉が共通する。そこで例えば古今和歌集におさめられた露の歌を並べ、複数の歌に共通する言葉を探してみる。

すると玉、涙、秋、おく、消などが見つかり、当時の人々にとって露といえはこのようなものだったと考えられる。

さて、御法巻の本文に戻ると、紫の上の歌「おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる秋のうは露」は、「今日は、いとよく起きゐたまふめるは」という源氏の言葉の「起く」を同音の「置く」にとりなし、「置く」といえば「露」、「露」といえばはかなく「消える」という連想によっている。つまり、源氏が嬉しそうに「起きていらつしやる」と言ったことが、言葉のつながりによって、「明け果つるほどに消え果てたまひぬ」という紫の上の死の伏線となってしまう。

もちろん古典の作者が現代の映画のような伏線回収を意図していたというわけではない。しかし引詩や引歌、本歌取りの味わいや縁語の面白さにふれる第一歩として、伏線を探すような読み方は有効ではなからうか。

したがって、もしこの授業のあとに生徒が「須磨巻の『枕をそばたてて』という引詩は、その白居易の詩句に比べられた『都府楼は……』という詩句を作った菅原道真を連想させ彼の作った『恩賜の御衣は今此に在り』の詩を介して源氏の朱雀帝への思いを導いているのではないか」と言ってくれば、それが穿ちすぎだとしてもすばらしいことだと思う。

注 新聞「美「引詩」」（秋山虔編『源氏物語事典 特装版』學燈社、一九九三）一五二頁

●特集Ⅱ白楽天と日本の文学

白楽天の影響を受けた日本の作品

諸田龍美
(愛媛大学)

平安初期、仁明朝に『白氏文集』が将来されて以後、白楽天の詩文はまさに一世を風靡した。島田忠臣・大江朝綱・菅原道真ら漢学者が愛好し、大江維時「千載佳句」、藤原公任『和漢朗詠集』には白楽天の詩句が他を圧して多く収録されている。「枕草子」一九七段(三巻本)に「書は、文集、文選」とあり、紫式部は中宮彰子に新樂府を進講。中世においても藤原定家が深く私淑したほか、『徒然草』一三段にも「文は文選のあはれるる巻々、白氏文集」とある。

枚挙に暇がないため、ここでは教科書掲載五作品に限定し、梗概とともに主要なものを紹介する。江戸時代には古文辞派の荻生徂徠による「白俗」の批判や、新奇性の低減、流行した『唐詩選』に不採録等から、直接の影響は少なくなる。

*主に水野平次『白楽天と日本文学』(一九八二年・大学堂書店)及び明治書院の新釈漢文大系『白氏文集』各巻を参照した。

■長恨歌 ちょうこんか

七言古詩(全一二〇句)

【梗概】三五歳、長安西郊の畧の役人であつた時の作。前半は玄宗・楊貴妃の出会いと歓楽の日々、安祿山の反乱と玄宗の長安脱出、楊貴妃の処刑など、ほぼ歴史事実に基づいた描写。後半は、亡き楊貴妃を追慕する玄宗の様子、魂を飛翔させる能力を持った方士の登場、仙界での楊貴妃と方士の対面、生前の「愛の誓い」の紹介など、虚構の場面が展開する。詩題の「恨」は「痛恨」の「恨」で、亡き楊貴妃に寄せる玄宗の追慕の恋情。「長恨歌」とは「永遠に続く愛の歌」の意。

【影響】『伊勢集』に「長恨歌の屏風を亭子院のみかどかせたまひて、その所よませたまひける」。『後拾遺和歌集』秋上に道命法師「長恨歌の絵に玄宗もとのところにかへりて……なげきたまへるかたをよめる」。

『詞花和歌集』雑上に源道済「長恨歌の心をよめる」として「おもひかねわれしのべをきてみればあさちが原にあきかぜぞふく」。『源氏物語』桐壺巻に、桐壺帝が桐壺の更衣(光源氏の母)のみを愛するので天下の人が「楊貴妃の例」になぞらえたこと。更衣の死後、帝が「長恨歌の御絵」を「あけくれ御覧」になったこと。形見の品を見た帝が「なき人のすみか、たづね出でたりけむ、しるしの釵ならましうかば」と嘆き「たづねゆくまほろしもがな伝にても魂のありかをそことしるべく」の歌を詠むことが描かれる。他に夕顔、葵、絵合、幻、宿木の巻にも引用。『枕草子』三四段に「梨花……楊貴妃の帝の御使にあひて泣きける顔に似せて、『梨花一枝、春、雨を帯びたり』などいひたるは……なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじとおほへたり」と。『大鏡』巻二、巻五に引くほか、『更級日記』に「世の中に長恨歌といふ文を、物語にかきてある所あんなりと聞くに、いみじうゆかし」と。『唐物語』では故事全体を紹介。『十訓抄』第一に「夕殿に螢とびて、第九に「唐帝の楊貴妃に別れし恨は長恨歌といふ文名におひて聞ゆ」と。謡曲の「皇

帝」「楊貴妃」がほぼ長恨歌に拠るほか「石近」「狹衣」「柶塚」「鈴落」「祇王」「柳」「花筐」「班女」「浮舟」「小督」「殺生石」にも引く。『平家物語』巻二に「(褒姒は)一度笑めば百の媚ありけり」、巻三に「(中宮の様子は)唐の楊貴妃、梨花一枝春の雨ををび」、巻六に「天にすまば比翼の鳥、地にすまば連理の枝とならんと、漢河の星をさして、御契あさからざりし建春門院」、巻六に「太液の芙蓉未央の柳」、巻十に「かの驪山宮の秋の夕の契も」、灌頂の巻に「(女院は)君王の傍に候はせ給ひて、朝には朝政をすすめ、よるは夜を専にし給へり」と。『宴曲集』巻五「年中行事」に「年々渡天の天の川、雲井の庭の乞巧簪、玄宗皇帝の、楊妃がかたちにかかりて、比翼連理と契し、驪山の昔ぞゆかしき」と。近松門左衛門の戯曲にも多くの摘句がある。『おくのほそ道』に「それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ。末の松山は……松のあひあひ皆墓原にて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終にはかくのごときと悲しさも勝りて」と。『林羅山文集』巻七一、随筆に「白居易新樂府を作りて李夫人を唱へ、長恨歌を作て楊妃を感ず。……而れども筆

力足らずして還て人をして之を読み之を好ましめ、風刺の意を失ふ」、同巻七三、随筆に「日本旧時、博士秀才皆白文集を誦す。……倭歌を誦する者も、亦其趣を用ふ。云へること有り「白氏第一第二の吟、常に握甄す可し」(藤原定家『詠歌大概』)。就中、秦中吟・新樂府・長恨歌・琵琶行の類、人人之を誦誦す」と。

■新豊折臂翁 しんぼうのうでをおりしおきな 雑言古詩

〔梗概〕三八歳、皇帝の側近左拾遺であった時の作。政治社会の問題をテーマごとに詠じた五〇首の連作「新樂府」の第九首。徴兵された兵士が無残に戦死するなか、長安東郊新豊出身の翁が兵役を逃れるため自ら石で右腕を砕いたことを描き、辺境地帯での無意味な戦功を戒める。

〔影響〕「十訓抄」第六に「彼の新豊の老人が雲南の軍をのがりたりけるは、自ら臂をうち折りける故なり」と。『源平盛衰記』巻三〇に「新豊県のお翁は八十八、命を惜しみて臂を折り」と。『太平記』巻九・巻一六にも引く。

■売炭翁 ばいたんおう 雑言古詩

〔梗概〕「新樂府」の第三二首。「炭売りの翁」が雪中苦勞して長安城内まで運んだ炭を、宦官が「宮市(宮人の売り買い)」と称して、わずかな絹を代価に牛車ごと奪い去つてゆく様を描く。

〔影響〕大江通国が「新樂府廿句和歌題序」で、この詩の「願天寒」を句題に和歌を詠んでいる。藤原忠通の『法性寺閑白御集』に「売炭翁」「和李部大卿見売炭翁愚作所贈之佳什」詩がある。『平家物語』巻三に「曉水を輾る輾はるか門前に横たわれり」。『源平盛衰記』巻二二に「曉かけては水を輾る車の音老牛の心を傷ましむ。』とはずがたり』の歌謡に「売炭翁はあはれなり、おのれが衣はうすけれど、薪をとりて冬を待つこそ悲しけれ」。『増鏡』に「売炭翁はあはれなり、をのが衣は薄けれど、御声いとおもしろし。林羅山『丙辰紀行』に「嶋田の民おのが家はただよひ流るれども旅客の囊(財布)をむさばるために洪水をよろこぶ、売炭翁が單衣にして年の寒きを待つが如し」と。

■八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九

はちがつつじゅうごにちよる、きんちゅうにどくちよくし、つきにたいしてげんきゅうをおもふ

七言律詩

【梗概】三九歳の作。旧暦の「仲秋の名月」の夜に、翰林院学士（皇帝の詔勅を作文する秘書官）であった白楽天が、宮中の翰林院で一人宿直しながら名月を眺め、遠地の親友元稹（元九）に思いを馳せた詩。この時元稹は宦官と争い湖北省の江陵府に左遷されていた。

【影響】『源氏物語』須磨巻に光源氏が須磨の浦の月を見て「こよひは十五夜なりけり……二千里の外の故人の心とずじたまへる例の涙もとゞめられず」。『平家物語』巻七・青山沙汰の事に「村上の聖代応和のころほひ、三五夜中新月の色白くさえ、涼風颯々たりし夜中に」。『源平盛衰記』一二・大臣以下流罪事に「照月波も澄渡り、二千里外故人心想像旅の哀さ最深し」。『増鏡』新島守に「はるぐと、見やらる、海の眺望、二千里の外も、のこりなき心地するいまさらめきたり」「同「久米のさら山」に「誠

に二千里の外の心ちするも今さらめきたり」と。『徒然草』一三七段に「花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは……望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも」と。『続千載和歌集』秋上の藤原俊成の歌に「月を見て千里の外を思ふにもこゝろぞかよふ白川のせき」と。謡曲の「雨月」「高野敦盛」「小督」「清水小町」「月少女」「融」「三井寺」「姨捨」「水尾山」に引くほか、『国姓爺合戦』梅檀女道行に「二千里外故人の心、三五夜中にあらねども、影を漏らさぬ月の船」と。『はいかい袋』の蕪村の句に「ゆめのゆき、も二千里の秋」。

■琵琶行

びわこう

七言古詩（全八八句）

【梗概】「琵琶引」ともいう。ともに「琵琶のうた」の意。四五歳の作。序文に「江州司馬に左遷された翌年の秋、旅立つ人を見送った際、どこかの舟から琵琶の音色が聞こえてきた。田舎に似合わぬ都会風の響き。尋ねると女は、もと長安の芸妓で、容貌が衰え商人の妻になったと。数曲弾き終えると悲しげにうなだれ、若い頃の楽しかったこと、今は落ちぶれ流浪の身である

ことを話した。その言葉に心を動かされた白楽天は、初めて左遷の悲しみを実感した」と。琵琶の女への強い共感、詩の末尾で「座中泣下ること誰か最も多き、江州の司馬青衫湿ふ」と歌われる。

【影響】『新撰朗詠集』下、雑（管絃）、雑（選別）、雑（遊女）に引くほか、『源氏物語』明石巻に、明石の入道が娘の琴を源氏に勧めて「商人の中にてだにこそ、ふる琴ききはやす人は侍れ」と。『枕草子』七六段に「ひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたる程に、大納言殿、琵琶の声やんで物語せんとすること遅し」、八九段に、中宮が琵琶を縦にして持っているのを見て「なかば隠したりけむは、えかくはあらざりけむかし。あれはただ人にこそありけむ」、九五段に「右近の内侍に琵琶ひかせて……物もいはでさぶらへば、『など、かう音もせぬ。ものいへ。さうさうしきに』と仰せらるれば、『ただ秋の月の心を見侍るなり』と申せば、『さもいひつべし』と仰せらる」と。『方丈記』日野山の閑居に「もし、桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江をおもひやりて」。『平家物語』巻三に「白楽天、潯陽江の辺にやすらひ給ひけむ其古を思ひ遣り」と。『源

平盛衰記』卷一二・大臣以下流罪に「但し心ある人は皆罪なくして配所の月を見んと願事なれば……白楽天……潯陽江側に遊覧し給ひける古きことに思慰て」、同・師長熱田社琵琶事に師長の琵琶の音色を「其声凄凄切切として又錚錚たり……大珠小珠の玉盤に落つるに相似たり」と。『唐物語』第二話に故事を翻案してのせるほか、『十訓抄』第十二(二七)に「彼潯陽江のほとりに琵琶を聞きしむかし語にことならず」、同(六〇)に「(少女の)としては十三にていとちひさかりければ、琵琶行の昔がたりおもひやられてあはれなりけり」と。『太平記』卷四に「四絃一声帛を裂くが如し」とあるほか、謡曲の「碇潜」「岩船」「猩々」「経政」に引く。『蕪村翁文集』宇治行に「四絃一声如裂帛と、白居易が琵琶の妙音を比喩せる絶唱をおもひ出て、『帛を裂琵琶の流や秋の声』と。大田南畝(蜀山人)『俗耳鼓吹』唐团扇に、故事を自在に翻案して掲載する。『林羅山文集』卷六六、随筆に「白楽天が琵琶行、其の抑揚頓挫、流離沈鬱の態、千載の下と雖も、宛然琵琶哀怨の声なり」と。

■香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁

こうろほうか、あらたにさんきよをばくし、そうどうはじめてなり、たまたまとうへきにだいす 七言律詩

【梗概】 四六歳の作。二年前、長安で宰相暗殺事件が起きた際、白楽天はいち早く意見書を提出。だが、越権行為を咎められ、江州司馬に左遷された。やがて廬山・香炉峰の近くに草堂を築く。この詩はその完成を祝い草堂の東壁に書き付けた五首の連作詩。著名な「日高く眠り足りて……」の詩は、その第四首。尾聯にこう詠う「心身ともに安らかで落ち着ける場所こそが帰ってゆくべき処だ。(名利を追求する連中が住みながら)長安だけが故郷ではない」。

【影響】『枕草子』二八〇段に中宮定子が「少納言よ、香炉峰の雪はいかならむ」と問うと、少納言が「御格子あげさせて、御簾高く捲き上げたれば、(中宮は)笑はせ給ふ」と。『源氏物語』総角巻に薫が「簾垂まき上げて(月を)見給へば、向ひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、今日も暮れぬと、かすかなる響きを聞きて」と。『大鏡』左

大臣時平の条に、菅原道真が太宰府で詠んだ「都府楼櫓看瓦色、観音寺只聴鐘声」の詩句について「これは文集白居易、遺愛寺鐘歇枕聴、香炉峰雪撥簾看といふ詩にもまさざまに作らしめ給へりとこそ、むかしの博士どもは申しつれ」と。『平治物語』唐僧来朝の事に「遺愛寺といふ寺はいづこにある。……白楽天世を連れし所ぞかし」。

『曾我物語』二・惟喬惟仁の位争の事に「(小野の山荘では)香炉峰の雪をば簾をか、げて見るらんと口吟み給ひけり」。『源平盛衰記』卷十・丹波少将上洛事に「いつしか田舎には引替で、入相の鐘の音、今日も暮れぬと打響く。彼遺愛寺の辺の草庵に似たりけり」、同卷一二・大臣以下流罪事に「都には引替で、枕に近き鐘の音信で、彼の遺愛寺の草庵の、ねざめも角也と思知られつつ」と。『平家物語』卷三に「大寺の鐘の声、遺愛寺の聞を驚かし、西山の雪の色、香炉峰の望を催す」。謡曲の「野寺」に「遺愛寺の暁の枕」と。『十訓抄』第一に「枕草子」の前掲話を取り上げ、『新古今和歌集』雑下に藤原俊成が「暁のこころをよめる」として「暁とつげのまくらをそばだてて聞くもかなしき鐘の音かな」と。

●特集Ⅱ白楽天と日本の文学

白楽天の名句

わたなべ、まさのき
渡辺雅之

(元筑波大学附属高等学校)

■絶世の美女、楊貴妃

まず、玄宗と楊貴妃の一大悲恋、物語「長恨歌」より。「長恨歌」は、まさに美辞麗句の宝庫である。味わうべき表現がきわめて多い。その中でも、楊貴妃の美女ぶりを、これでもかと美的に表現しているものが多数見受けられる。ここでは、そのうちから、二つの印象深い表現を取り上げる。

廻眸一笑百媚生

六宮粉黛無顏色

眸を廻らして一笑すれば百媚生じ
六宮の粉黛顔色無し

玄宗と楊貴妃が初めて出会った時、すなわち「長恨歌」のはじめの部分(第七・八句)。

「楊貴妃が振り返ってにっこりほほ笑むと、多くのなまめかしさが生まれ、後宮の美女たちの美しさも、まったく形無しである。」
続いて、安祿山の乱が起き、楊貴妃は縊り殺される。玄宗は忘れられず、天上界に魂魄となった楊貴妃を探させるといって後半

の場面(第九一―一〇〇句)から。

玉容寂寞淚欄干

梨花一枝春帶雨

玉容寂寞として涙欄干
梨花一枝春雨を帯びたり

「玉のような美しい容貌は寂し気であり、涙がはらはらと流れ落ち、その様子は一枝の梨花の花が、春の雨にしっかりとぬれていくように。」彼女の悲しくも美しい姿を描く。
『枕草子』三十五段に、「楊貴妃の、帝の御使ひに会ひて泣きける顔に似せて、『梨花一枝、春、雨を帯びたり。』など言ひたるは、おほろけならじ」とある。

■憂憤の名句

白楽天の詩には、権力者の横暴、世の中の矛盾を憤った、いわゆる「社会詩」といわれるものも多い。ここでは、「売炭翁」から、その感動的な部分を取り上げる。

可憐身上衣正單

心憂炭賤願天寒

可憐むべし身上の衣正に單なるを
心に炭の賤きを憂へ天の寒からんことを願ふ

炭焼きを生業とする老人が、苦勞して作った炭を売りに都に来る。ところが、その炭を、勅命だと称する役人に、只同然に取り上げられてしまうという詩である。その前半部分。「真冬であるのに、じいさん

の着ているものは夏物の單。にもかかわらずじいさんは、炭がたくさん売れるように天候がもっと寒くなってくれと願っている。」悲惨な光景である。この詩を授業で扱うと、生徒の感想はこの二句に集中する。

何ともやりきれない思いを抱くのであろう。
林羅山『丙辰紀行』に、「島田の民、お

のが家居ただよひ流るれども遊客の裳をむさばるゆゑに洪水を喜ぶ。売炭翁が単衣にして年の寒きを待つが如し」とある。

■秋の秀句

季節を詠みこんだ名詩が多いのも白楽天である。ここでは秋の詩を取り上げる。

三五夜中新月色 二千里外故人心

三五夜中新月の色 二千里外故人の心

「八月十五日夜、禁中に独直し、月に対して元九を憶ふ」と題する詩から。

仲秋の名月の夜、宮中で一人宿直し、左遷されて遠い地にいる旧友、元九(元稹)を思いやつの詩。

「十五夜の新たに昇ってきた月の光、その光を見て、二千里の彼方にいる元九のことが偲ばれる。」数字を巧みに用いた名句。
『源氏物語』須磨巻に、「二千里の外、故人の心」と誦したまへる。」とある。

●特集Ⅱ白楽天と日本の文学

大学入試問題における

白楽天

うゑまつ よしはる
植松義治

(元河合塾国語科講師)

融合問題では、白楽天の詩文が日本文学に深く浸透していたことを主題とする。諷諭や閑適が多く、感傷もある。表現の平易さと多様性、物語を思わせる視覚的描写の古詩が特徴である。元稹や他の友人との友情の絆も主題である。

■共通テスト・センター試験

『族類を以て賢を求むるを請ふ(請以族類求賢)』(共通テスト、二〇三)

『鷹を放つ(放鷹)』(センターⅠ・Ⅱ本試、一九二)

『春河』(センターⅠ追試、一七七)

■各大学入学試験

『王昭君二首』(尾道市立大、二〇三)

『河亭晴望』*融合問題(北海道教育大、二〇一〇)

『閑吟』(琉球大、二〇一)

『旧を思ふ(思旧)』(立教大、二〇一)

『金鑾子を念ふ(念金鑾子)』(佐賀大、二〇八)

『元九に与ふる書(与元九書)』*『李杜の詩集を読み、因りて巻後に題す』とともに出題(福岡教育大、二〇六)

同(南山大、二〇一)

『蝗を捕ふ(捕蝗)』(岐阜大、二〇九)

『江樓の夕望客を招く(江樓夕望招客)』(熊本大、二〇四)

『五弦を弾ず(五弦弾)』(早稲田大・商、二〇)

同 *『今鏡』との融合問題(成城大、二〇六)

『香山寺白氏洛中集記』(早稲田大・人間科学、二〇一)

『酒を把る(把酒)』(静岡大、二〇六)

『耳順の吟 敦詩・夢得に寄す(耳順吟 寄敦詩夢得)』*融合問題(早稲田大・政経、二〇一)

『謝靈運の詩を読む(読謝靈運詩)』(筑波大、二〇一)

『舟行』(岡山大、二〇一)

『州民に別る(別州民)』(岡山大、二〇一)

『春江』(早稲田大・法、二〇五)

『新豊の臂を折りし翁(新豊折臂翁)』(早稲田大・政経、二〇四)

『草堂記』(小樽商科大、二〇六)

『中隱』(岐阜大、二〇一)

『長恨歌』*陳鴻『長恨歌伝』との融合問題(早稲田大・法、二〇七)

『天度るべし(天可度)』*融合問題(成蹊大、二〇七)

『熱に苦しみ恒寂師の禅室に題す(苦熱題恒寂師禅室)』*融合問題(福岡大、二〇七)

同(神戸大、二〇三)

『猿屏賛 并びに序(猿屏賛 并序)』(九州大、二〇一)

『八月十五日の夜、禁中に独直し、月に對して元九を憶ふ(八月十五日夜、禁中独直、對月憶元九)』*『方丈記』との融合問題(早稲田大・社会科学、二〇一)

同(早稲田大・政経、二〇六)

『八駿図』(早稲田大・法、二〇一)

『微之に与ふるの書(与微之書)』(宮崎大、二〇一)

『夜砧を聞く(聞夜砧)』(早稲田大・人間科学、二〇一)

『李杜の詩集を読み、因りて巻後に題す(読李杜詩集、因題巻後)』*『元九に与ふる書』とともに出題(福岡教育大、二〇一)

『旅雁を放つ(放旅雁)』(東京大、二〇一)

*底本には『白居易集箋校』(上海古籍出版社)、『白居易詩集校注』(中華書局)及び『白楽天全詩集』(日本図書センター)を用いた。

●出題作品の五十音順に配列した。

新連載

漢語再発見 ①

加藤 徹
(明治大学)

漢文

日本語で「古文」「漢文」というときの「漢文」は純然たる日本語だ。

中国の文献に「漢文」という言葉が出てくる場合、たいいてい日本語の漢文とは違う意味である。

漢王朝の滅亡後、漢の建国初期の名君だった文帝と最盛期の武帝は、それぞれ「漢文」「漢武」と呼ばれた。

中国文学史で「漢文、唐詩、宋詞、元曲」というときの漢文は「漢の時代の散文」の意味だ。前漢の司馬遷の『史記』と、後漢の班固の『漢書』は、傑出した歴史書だが、その簡潔で躍動感のある文体は、後世の散文の模範とされた。

清の時代の「漢文」も、日本語の漢文とは意味用法が違う。清は「満漢併用制」のハイブリッド国家だった。行政文書でも「満文」と「漢文」が公用語だった。清代の「漢文」は、「満文」や「洋文」（西洋語の文）と対になる語だった。

現代の中国人にとって、『論語』や、李白や杜甫の漢詩は「古文」（中国語ではグーウエンと発音する）である。中国人はこれらを「漢文」（ハンウエン）とは呼ばない。

昔の日本人も「漢文」という言葉はあまり使わなかった。その理由は、江戸時代に「和服」という言葉がなかったのと同じである。江戸時代に「洋服」は普及していなかった。着物をわざわざ「和服」と言う必要はない。「和服」は、明治時代に生まれたレトロニム (retronym) だ。つまり、新しい区分を過去にさかのぼらせた「再命名」の言葉である。

「漢文」もレトロニムだ。昔の日本では単に「文」と言った。清少納言は『枕草子』第一九八段で「文は、文集。文選。新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。」と書いた。全部、漢文である。

日本語の「詩歌^{しうか}」は、漢詩と和歌を指した。明治時代になっても、単に「詩」と言えば漢詩を意味し、日本語による詩は「新体詩」と呼んだ。

国語

「国語」も、近代的な新しい言葉である。漢文に「国語」という文字が出てきた場合、たいていは古代中国の歴史書『国語』を指す。この書名は、国々の歴史物語、の意味である。明治の文豪・夏目漱石は、『文学論』序の中でこう述懐した。「余は少時好んで漢籍を学びたり。これを学ぶ事短かきにもかかはらず、文学はかくの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。」

「左国史漢」は漢文古典の四つの歴史書『春秋左氏伝』『国語』『史記』『漢書』を指す。漱石も森鷗外も幸田露伴も、幕末生まれの文豪のバックボーンは漢文の素養だった。

清の時代には、満州語を指して「国語」と言うこともあった。これは、ある民族の固有語、くらいの意味だ。近代的な国民国家の国語、つまり西洋の *national language* の訳語としての「国語」は、近代に成立した新漢語である。

授業科目名としての「国語」は、純然たる日本語だ。英国や米国の学校の科目名には *English* はあるが、*national language* はない。中華人民共和国の学校の科目名には「語文（ユイウェン）」はあるが、「国語（グオユイ）」はない。国により科目名のコンセプトが違う理由を話すと長くなるので、別の機会にゆずる。

江戸時代の文人であった頼山陽が著した『日本外史』は、漢文で書かれた歴史書である。その巻十六「豊臣氏中」二月二十八日の条に「漢文」という語が出てくる。中国古典という意味ではない。外国人にも読める漢字だけの文章、という意味だ。朝鮮出兵（文禄・慶長の役）で秀吉が京都を出発したとき、ある人が「盍以善漢文者從（盍ぞ漢文を善くする者を以て從へざる）」ときいた。秀吉はニヤリと笑い「吾此行、将使彼用我文耳（吾が此の行、將に彼をして我が文を用ひしめんのみ）」と答えた。「どうして漢文の読み書きが得意な秘書をお連れにならないのですか?」「今度の遠征の目的は、外国を征服し、外国人も日本語を使うようにさせるためだからさ。『日本外史』のこのくだりは、昭和の戦前の「漢文」教科書にも掲載され、生徒も学習させられた。

現代と同じ意味の「漢文」、つまり「国文」「古文」「英文」などと同列の漢文という意味用法が表れるのは、近代になってからだ。明治四十五年（一九一二年）、文部省は「漢文教授二関スル調査報告」をまとめた（『官報』第八六三〇号、三月二十九日）。漢文という言葉の意味用法や漢文教科書の訓読法の指針は、この時に確定し、令和の今日に至っている。

陶淵明をめぐる五つの断章・その二

〈子供〉の発見（前篇）

坂口 三樹
(文教大学)

陶淵明（三六五―四二七）は、日常生活を手触り確かに描いて見せた。その具体的な表れの一つとして、しばしば子供の姿がその詩に詠じられることが挙げられる。例えば「和郭主簿（郭主簿に和す）二首」の「其一」には、まだことはもううまくしゃべれない幼児の姿が、「弱子戲我側、學語未成音（弱子我が側らに戯れ、語を学びて未だ音を成さず）」と活写されている。ほかにも、「酬劉柴桑（劉柴桑に酬ゆ）」には「命室攜童弱、良日登遠遊（室に命じて童弱を携へ、良日遠遊に登らん）」とあり、「歸去來兮辭（帰去來の辞）」では「僮僕歡迎、稚子候門。……攜幼入室、有酒盈罇（僮僕歡迎へ、稚子門に候つ。……幼を携へて室に入れば、酒有りて罇に盈てり）」と詠じられるなど、淵明はその日常生活を描くにあたってしばしば子供を登場させている。そればかりか、「命子（子に命く）」と「責子（子を責む）」のごとく、子供を主題とした特異な作品さえ残している。なにゆえ淵明は、詩の題材としてしばしば子供を取り上げたのか。その問いへの答えを探る試みの一環として、ここではまず、「命子」の一篇について検討するところから始めよう。

「命子」は、四言八句を一章として、全十章からなる。その第一章は、陶家の開祖からうたい起して、夏・殷・周の三代にわたる祖先の輝かしい功業について誇らかに記す。

悠悠我祖 悠悠たる我が祖

爰自陶唐 爰に陶唐よりす

邈爲虞賓 邈として虞の賓と為り

歷世重光 歴世 光を重ね

御龍勤夏 御竜 夏に勤め

豳韋翼商 豳 韋を翼く

穆穆司徒 穆穆たる司徒

厥族以昌 厥の族 以て昌んなり

以下、第二章から第五章までは、戦国時代から漢代を経て東晋に至るまでの時代の流れをたどりながら、前漢の愍侯陶舍・丞相陶青父子と淵明の曾祖父である東晋の長沙桓公陶侃の功績が称揚され、続く第六章では祖父の武昌太守陶茂と亡父（名は未詳）の事績が述べられる。第七章では、それら先人に比してふがない己への自責と長子の誕生が詠じられ、それを承けて第八章では我が子の名と字に込めた願いが語られる。さらに第九章では子を思う親の思いが確認され、第十章において我が子に託する思いを述べて一篇を結ぶ。

この詩でまず注意を惹くのは、その用語である。第一章には、前漢・韋孟（生没年未詳）の「諷諫」（『文選』巻十九）にある「肅肅我祖、國自豳韋（肅肅たる我が祖、国すること豳韋よりす）」、「摠齊羣邦、以翼大商（群邦を摠べ齊く、以て大商を翼く）」とよく似

た表現が用いられ、第三章の「於赫愍侯（あはれ於赫たる愍侯）」や第七章に見える「嗟余寡陋、瞻望弗及（あはれ余寡陋にして、瞻望するも及ばず）」には、後漢・傅毅（ふき）の「（一九〇）の「（一）迪志詩」の「於赫我祖、顯于殷國（於赫たる我が祖、殷の國に顯る）」、「伊余小子、穢陋靡逮（伊れ余小子、穢陋にして逮ぶ靡し）」との類似が認められる。韋孟・傅毅の詩は、ともに唐・歐陽詢『芸文類聚』卷二十三「人部七」の「諷」及び「（二）鑑誠」に分類されている作であって、「命子」がそうした詩の用語を襲っている事實は、それが訓誡を述べる詩の系譜に連なる作であることを示唆していよう。

さらに、この詩が四言詩である点にも注意を払う必要がある。四言のリズムは、五言に比して平板・単調とされるが、同時にそれは重厚・謹嚴な印象を与えるものでもあった。『文選』所収の詩において、「勸励」や「献詩」に分類される諸作がいずれも四言詩である事實は、かかる四言のリズムの特性と深く関わっている。これらの点を勘案すれば、淵明の「命子」が我が子への訓誡を意図して詠じられた作であることは、ほぼ疑いを容れない。

後漢から魏晋南北朝にかけては、実は子供への訓誡を述べた「家誡」あるいは「誡子書」と呼ばれる文章が大量に書かれた時代であった。こうした文章が数多く書かれた背景に、家の存続と繁栄を何よりも重視する当時の貴族社会の価値観があったことは想像に難くない。家の後継ぎとなる長子の誕生を言祝い訓誡を述べた「命子」は、「家誡」「誡子書」の盛行をもたらしたのと同じ社会思潮を背景に制作されたものである。

しかし、この詩は我が子への訓誡を、しかつめらしい口調で述

べるばかりではない。例えば第八章には「名汝曰儼、字汝求思。溫恭朝夕、念茲在茲。尙想孔伋、庶其企而（汝に名づけて儼と曰ひ、汝に求思と字す。朝夕に溫恭なれ、茲を念へば茲に在り。尙ほ想ふ孔伋を、庶はくは其れ企てんことを。）」とあつて、「儼」と「求思」という名と字に込めた、孔伋（孔子の孫）のような人物に育つてほしいとの思いが披瀝され、第九章では『莊子』天地篇に見える「厲（癩病）之人」の話を踏まえて、「凡百有心、奚特於我（凡百心有り、奚ぞ特だに我に於いてのみならんや）」と述べ、すべての人がともに備えている子を案ずる親としての思いが切々と語られる。それに続けて、結びの第十章には次のようにいう。

日居月諸 日や月や

漸免於孩 漸く孩より免れん

福不虛至 福は虚しくは至らず

禍亦易來 禍も亦た来たり易し

夙興夜寐 夙に興き夜に寐ね

願爾斯才 爾が斯の才を願ふ

爾之不才 爾の不才なる

亦已焉哉 亦た已ぬるかな

ここでは、我が子の才を願いつつも、たとえ不才であってもそれを甘んじて受け入れようとする、我が子に寄せる親としての深い情愛が示される。このように、訓誡の枠組みを超えて親としての真情が率直に吐露されている点にこそ、この詩の特色は存するのである。

（以下、次号）

◆大修館書店 国語教科書のご紹介

大修館書店の「古典探究」

豊富な教材と資料で、古典を主体的に楽しく学ぶ教科書

「言語文化」と「古典探究」では、複数資料の読み比べや主体的な探究学習、古典作品への評価・再解釈などが注目されています。実際にどうやって授業に取り入れるか、戸惑うことも多いのではないのでしょうか。大修館書店の「古典探究」は、そうした疑問にお応えし、生徒が主体的に学ぶための工夫が満載の教科書です。

『古典探究 古文編・漢文編』

『精選 古典探究』

- ①入試を見据えた教材化と、充実の読み比べ教材
- ②探究学習に取り組みやすい構成
- ③高校生の疑問に答える充実のコラム
- ④理解を促す多彩な図版

教科書の特徴

[古探 706]



『古典探究 漢文編』
A5判・204ページ

[古探 707]



『古典探究 古文編』
A5判・294ページ

充実の教材が 176 本！
古文、漢文だけでなく、
現代文の教材も多数収録して、
古文の読解を深めます。

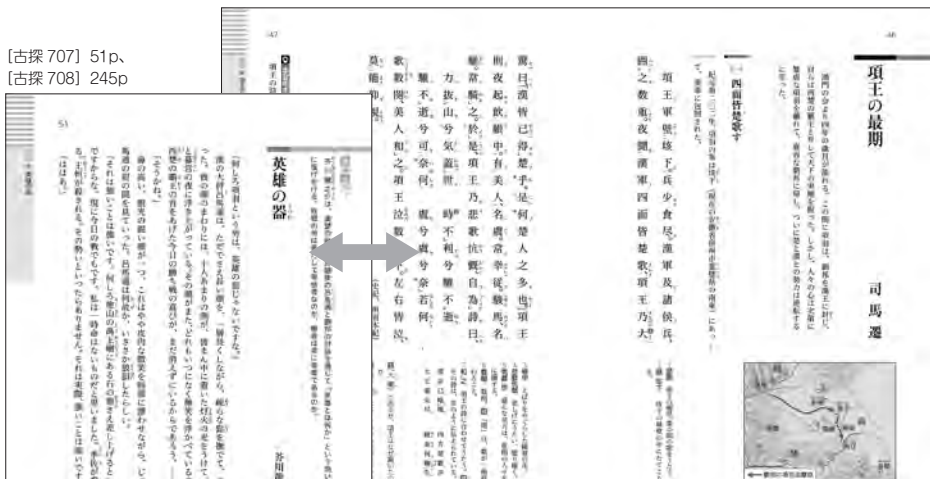
[古探 708]



『精選 古典探究』
A5判・406ページ

一冊でも充実の教材数。
古文、漢文だけでなく、
現代文の教材も収録して、
古文の読解を助けます。

[古探 707] 51p、
[古探 708] 245p



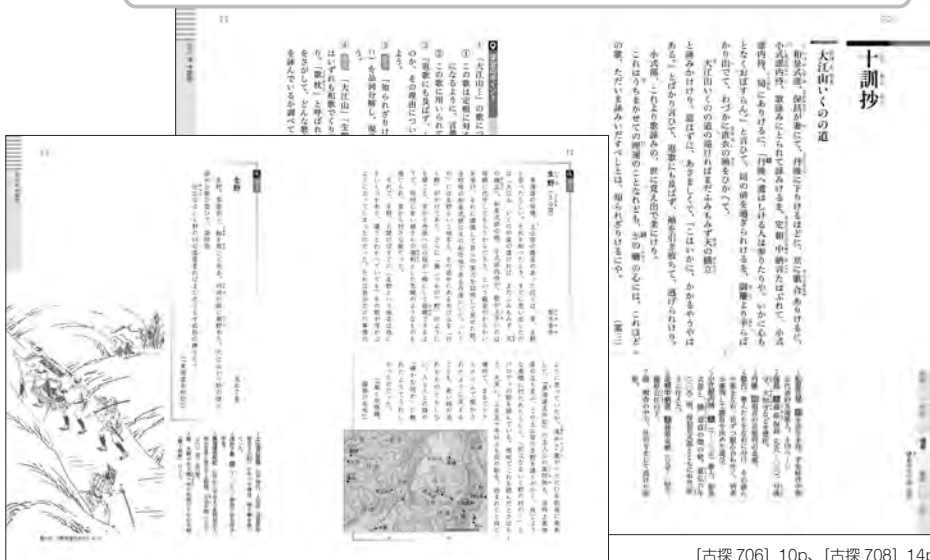
①入試を見据えた教材化と、充実の読み比べ教材

教材の理解を深めるための教材「読み比べ」「視点」を新設。

漢文×現代文、古文×漢文、古文×古文……など、さまざまな教材を組み合わせて読み比べ、教材の理解を深めます。

古文・漢文教材の江戸時代のパロディ作品や、現代の人気作家のエッセイ、専門家による解説文まで多種多様な文章を掲載しています。

複数の教材を比べて読んで課題に取り組む学習は、大学入学共通テストなどの試験対策としても活用できます。



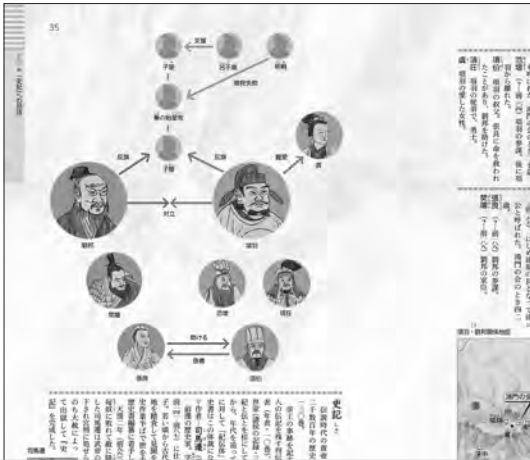
[古探 706] 10p、[古探 708] 14p

[古探 706] 12p、[古探 708] 16p

掲載ページはすべて『古典探究 古文編・漢文編』と『精選 古典探究』の共通教材です。

[古探 707] 34p、[古探 708] 232p

[古探 708] 3



古典を探究②

「探究学習」の構成

探究学習の過程

1. 基礎知識の習得 (基礎知識の習得) → 2. 応用・発展 (応用・発展) → 3. 探究・発表 (探究・発表)

探究学習の成果

探究学習の成果は、探究学習の過程を通じて得られる。

探究学習の過程

1. 基礎知識の習得 (基礎知識の習得) → 2. 応用・発展 (応用・発展) → 3. 探究・発表 (探究・発表)

探究学習の成果

探究学習の成果は、探究学習の過程を通じて得られる。

②探究学習に取り組むやすい構成

「探究学習」を授業に取り入れやすくする課題や、課題に取り組むための補助となる図解資料、コラムを充実させました。

巻頭には調べ学習に役立つ「古典を探究」を設けるなど、自主学習のためのヒントが満載です。

[古探 707] 55p、[古探 708] 249p

③高校生の疑問に答える充実のコラム

古文漢文の基礎知識をまとめた「古文の窓」「漢文の窓」のほか、古典にまつわる疑問に答えたり、生徒の興味を引き出したりするコラム「豆知識」を設けました。

「豆知識」では関連図書の紹介もしています。

古文漢文の基礎知識をまとめた「古文の窓」「漢文の窓」のほか、古典にまつわる疑問に答えたり、生徒の興味を引き出したりするコラム「豆知識」を設けました。

「豆知識」では関連図書の紹介もしています。

古文漢文の基礎知識をまとめた「古文の窓」「漢文の窓」のほか、古典にまつわる疑問に答えたり、生徒の興味を引き出したりするコラム「豆知識」を設けました。

「豆知識」では関連図書の紹介もしています。

[古探 707] 86p、[古探 708] 276p

大修館書店の古典が学べる教科書

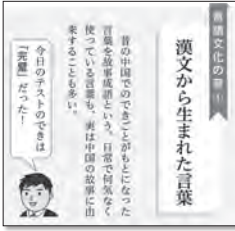
必修科目

『言語文化』



[言文 705]
A5判・364ページ

古典×現代、日本×世界、
タテとヨコ、二つの軸で言葉
と文化を考える。
広い視野で学べる教科書です。



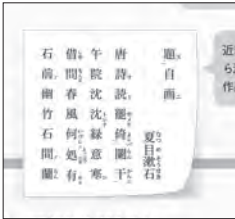
漢文学習への意欲を高める
コラムを複数設けていま
す。

『新編 言語文化』



[言文 706]
B5判・312ページ

大判の紙面で図版資料を豊富
に掲載。
楽しみながら「言語文化」の
つながりや広がりを実感でき
ます。



定番教材のほか、日本の漢
詩も掲載しています。

「文学国語」の教科書でも
古典が学べます！

選択科目

『新編 文学国語』



[文国 705]
A5判・398ページ

小説や随想、評論だけでなく、
古典の名作をコンパクトに味
わえる「古典の世界」を設け、古
典作品を11本収録。文学のす
べてを一冊に盛り込みました。



生徒の興味を引き出すため
の「ブックガイド」が充実
しています。

●小特集Ⅱ 諸橋轍次生誕一四〇年

漢学者・諸橋轍次は、明治一六年（一八八三）六月四日、新潟県南蒲原郡下田村（現在の三条市庭月）に生まれ、た。教育者の父のもとで幼い頃から漢学を学び、母が語る孫悟空の話に耳を傾けました。東京高等師範学校を卒業後、中国留学を経て同校教授となり、教育者・研究者として大成します。

戦禍に見舞われるなど幾多の困難を乗り越え、諸橋が三〇年の歳月をかけて編纂した『大漢和辞典』は、親文字五万余字、熟語五三万余語を収録。漢字文化の一大宝庫として、各方面から高い評価を得てきました。

令和五年（二〇二三）は、諸橋の生誕一四〇年。その偉業を次世代に伝える記念行事や、関連刊行物を紹介します。

諸橋轍次博士生誕一四〇周年記念事業について

嘉代隆一
（諸橋轍次記念館長）

諸橋轍次博士生誕一四〇周年を迎え、博士の学徳を顕彰し、漢字文化の交流拠点を標榜する当館では、年間を通じた記念事業により、没後四〇年を経た諸橋轍次を改めて振り返る生誕一四〇周年記念事業の展開を図ってまいりました。

ご承知のとおり諸橋轍次は『大漢和辞典』の編纂に代表される「漢学者」として、約六〇年におよぶ「教育者」として、そして故郷をこよなく愛する「先達」として、その多大な足跡は、まさに「三位一体」となっており、「諸橋轍次」その人を表しています。

コロナ禍の癒えぬ中、博士の学徳に触れるべく、北は北海道から南は沖縄まで、全国からご来館いただきました。

記念事業は、博士生誕日における静嘉堂文庫美術館の河野元昭館長をはじめ多くの先生方から記念講演をいただくとともに、市内小・中学生を対象にした事業（大好き「漢字」の学校めぐり）や記念館諸事業（漢字文化理解力検定・全国漢詩大会など）における記念事業、四回の企画展示（「諸橋轍次とふるさとの学校」では故郷の小・中・高校の直筆校歌）、生前の博士を知る方々によるお話の記録映像化、新潟市「にいがた文化の記憶館」企画展はじめ博士の関係した学校・団体による生誕記念企画の催し、また、新潟日報朝刊題字脇に四年間連載した漢字文化理解力検定委員諸氏による漢字

コラム『行不由徑』の書籍化・刊行と、いまなお多くの方々にその学徳を敬慕される諸橋轍次博士生誕一四〇周年記念事業でした。令和九年には国道二八九号が全線開通し太平洋側と繋がります。多くの方に当館にお立ち寄りいただき、漢字文化に浸っていただくことを願っています。

◆漢学の里 諸橋轍次記念館



諸橋轍次記念館（内部）



諸橋轍次と『大漢和辞典』

池澤正晃
いけざわただあき

(元漢和辞典編集者)

編纂の動機

諸橋轍次が、『大漢和辞典』編纂の動機は何かとよく人に問われるが、実のところそれほど確たる信念をもって始めたわけでもない。…そんなわき道に手を出す考えは全然なかった…」（私の履歴書）と自ら書いているように、一九二六年に鈴木一平（大修館書店創業者）から漢和辞典編纂の依頼があったとき、諸橋には引き受ける気がまったくなかった。中国に留学したときの経験から、「完全な原典によって完全な解釈を施した漢和辞典」の必要性は感じていたものの、東京高等師範学校漢文科主任教授の地位にあつて学位論文の執筆に忙しい四十代少壮気鋭の漢学者には、辞典編纂というのは「わき道」に思えたらしい。

諸橋轍次は、一八八三年六月四日、現在の新潟県三条市庭月に、父安平と母シヅの次男として生まれた。数え年五歳で『三字経』の素読、七歳で『論語』を父から学ん

だ諸橋は、一九〇四年に東京高等師範学校国語漢文科に入学する。当時の校長は嘉納治五郎、学級担任のはちに『大日本国語辞典』を完成させた松井簡治だった。一九〇八年、卒業と同時に群馬師範学校に赴任するも一年で再度上京、東京高等師範学校漢文研究科に入学、卒業後に二度の中国留学を経て一九二一年に同校教授となった。

漢和辞典編纂を開始する

一九二八年九月、「漢和辞典編纂」の契約書が取り交わされた。鈴木にとつては、関東大震災後いち早く再建を果たし、十分な資金力のもとに念願の辞典出版に乗り出すという記念すべき年となった。諸橋が辞典編纂を引き受けた理由の一つに、教授を兼務していた大東文化学院（大東文化大学の前身）での学園騒動で退学になった学生たちの存在があった。東洋文化振興を目的として創設された大東文化学院には、漢文の読める優秀な学生が集まっていた。「漢字は謂わば東洋の文化を運ぶ車であり舟である」という考えのもとに事典の要素も取り入れた言葉の辞典をつくりたいと思つた

諸橋は、その学生たちに辞典の仕事を手伝ってもらふことはできないかと考え、鈴木への申し出を受け入れた。語彙カードに用例・出典を明記、用例には調点を施し、出典名だけあつて用例がないものは原典を最初からあたつて用例を見つけ出すという地道な作業が続いた。数年後にはそのカードが三〇万枚以上に達したため、刊行計画の大幅な拡大・変更が行われた。

『戦前版』巻一刊行

一九三三年、鈴木は組版工場を新設、一九四一年秋までに約一万三〇〇〇ページ分を組み上げた。一九四一年一月、太平洋戦争が勃発すると印刷・製本関係の資材が逼迫、用紙はすべて割当制になるなど、多くの困難が立ちちはだかったが、一九四三年九月一日に「巻一」が刊行された。しかし、一九四五年二月の空襲は「巻二」以降の組置きしてあつた活字を一夜にして約百トンの巨大な鉛の塊と化してしまふ。諸橋は、不測の事態に備えて全巻分の校正刷を自宅のほかに世田谷の静嘉堂文庫、山梨県の宝鉾山に分散疎開させた。

「初版」刊行

戦災を免れた全巻の校正刷を原稿として、辞典事業は戦後まもなくに東京高等師範学校・東京文理科大学出身者が中心となって再開された。戦災によって活字での組版が困難となったために写真植字を採用することになり、五万字に上る原字制作を石井茂吉（写研創業者）に依頼した。一九六〇年五月に「初版」全一三巻が完結、鈴木が諸橋に辞典編纂の依頼をしてから三五年、諸橋は七八歳、鈴木は七二歳になっていた。

「縮写版」刊行

一九六五年、諸橋に文化勲章が授与され、一九六八年には「初版」（B5判）をA5判に縮小した「縮写版」全一三巻が完結した。定価が抑えられ入手し易くなった「縮写版」は一般読書家や学生に予想以上の売れ行きをみせた。一九七一年、鈴木は「縮写版」を見届けて八三年の生涯を閉じた。社葬では、諸橋が〈友人代表〉として弔辞を述べた。

「修訂版」刊行

「残生の凡ては此の書の補訂に捧げよう」という諸橋の素願は鎌田正（東京教育大学

名誉教授）・米山寅太郎（静嘉堂文庫長）の二人に託された。大修館書店では、鎌田を

所長とする東洋学術研究所を設立、本格的な修訂作業が始まった。作業は、三〇万枚におよぶカード化された語彙について原典と照合する出典調査が主だったが、字音・解字にも修正が加えられた。「修訂版」は、一九八六年に全一三巻が完結するが、一九八二年二月八日、諸橋は「修訂版」をみることなく数え百歳の天寿を全うする。

「語彙索引」「補巻」の刊行―全一五巻完結

「辞典の生命をして不朽ならしめるためには、その修訂増補は幾度か繰り返されねばならぬ」と「大漢和辞典修訂の序」を書き残していた諸橋の遺志は、引き続き鎌田・米山に託された。一九九〇年には、語彙を新字体・現代仮名遣いによる五十音順で配列した「語彙索引」が、二〇〇〇年には漢字を取り巻く状況の変化に対応すべく親文字・語彙を増補した「補巻」が刊行され、編纂事業は全一五巻となって完結した。

二〇一八年、「デジタル版」が発売された。これによってその膨大な辞典データはパソコン上でも検索・閲覧が可能となった。

好評重版

世界最大級の漢和辞典編纂の歴史をたどる

『大漢和辞典』の百年

池澤正晃著



A5判・260ページ
定価3,740円
(本体3,400円+税10%)

一九一八年の大修館書店創業から一〇年後に編纂が開始された『大漢和辞典』。その修訂・増補を含めた編纂過程と二〇一八年のデジタル版発行までの百年の歩みを著者と出版者の両面からたどり、豊富な図版資料とともに紹介する。

また、活版印刷が主流だった時代、なぜ紙型が出版社にとって大きな財産と言われたのかなど、当時の印刷・出版事情などについて知ることもできる。

◎新商品紹介

ジグソーパズル 漢字5万字



1000 ピース (500mm×750mm)

4色・箱入り

直販サイト販売価格：3,850 円

(本体 3,500 円+税 10%)

詳しくはこちら→



■五万字を一覧できる

『大漢和辞典』（諸橋轍次著、鎌田正・米山寅太郎 修訂増補）に収められた約五万字の漢字が、千ピースのジグソーパズルになりました。漢字は、伝統的な部首配列で、部首内は画数順に並べています。教育漢字は赤色、常用漢字は青色、人名用漢字は緑色で示しました。

二〇二〇年に発売されたポスター、「ながめて楽しい 漢字5万字」（B全判・728mm×1030mm・税込二七五〇円）とあわせて、教室でもぜひご利用ください。

■挑戦してみました

編集部でも、このジグソーパズルに挑戦してみました。一つ一つのピースの中の漢字を見て、部首や画数を手がかりに組み立てていくと、「こんなに画数の多い漢字があるのか」「『燕』や『鳥』は『火』部に入っているのか」「『木』『水』『心』などの部首の漢字をよく見かける」など、新たな気付きが多々ありました。ジグソーパズルで楽しみながら、漢字について知り、考えるきっかけにもなりそうです。

八時間半ほどで、無事、完成しました。



原寸大の組み立て見本（写真奥）付きです。

QUESTION & ANSWER

正字・異体字の区別

Q 始皇帝暗殺を企てた刺客「ケイ軻」のケイは「荊」「荆」どちらを書くのが正しいの？

を覆っていたことがうかがえます。

より古い周代の金文を調べると、実際に「荊」のように書かれていました。漢代の隸書でも、ほぼ「荊」のように書かれていますから、秦代には「荊軻」も草冠を大きく書いていたことでしょう。

楷書体が成立した六朝時代から、「荊」と書かれるようになります。字源の意識が弱まり、筆法やバランス、形の似た別の字からの類推が生じたためでしょう。この字を構成する「艸」「开」などの部分は、六朝時代以降さまざまな字体（異体字）を派生しました。「荊」は、実際によく用いら

れたので、「俗字」と認定しうるものです。明代の『字彙』など歴代の漢字辞典は、習慣に従いこれを見出しの字体としました。『大漢和辞典』もそうしています。清朝の康熙帝の勅撰による字書『康熙字典』は、字源を重んじて篆書体に従い、「荊」という字体を正しいものと認定したのです。

なお、日本では、「表外漢字字体表」で「荊」を単なるデザインの違いと見なしました。一方、漢和辞典には、配置に違いを持つ異体字（動用字）とみて、俗字というラベルを貼るものもあるでしょう。現在の中国では「荊」を正しい字体と規定しています。なお、「荊」を「正字」、「荊」を字源に即した「本字」とみなす立場もあります。

他にも揺れのある字体があります。たとえば「蓮」「荊」は昔から草冠が右上に小さく書かれることがありましたが、過去の漢和辞典では字体が違うと明記されはしませんでした。逆に「騰」は、草冠を大きく書くことがとくに日本で増えていました。

こういった慣習が認められるものとは別に、常用漢字の「茨」（字形のことなどは『方言漢字事典』を参照）や「落」「薄」の草冠を小さく、「漢」「漠」の草冠を大きく書くくと、誤字とされるので注意しましょう。

A 笹原宏之
ささはらひろゆき

（早稲田大学）

「ケイ軻」の姓は「荊」とも「荆」とも書きます。棘のある低木であるイバラを意味します。湖北省、湖南省の辺りも指し、姓にもなりました。

漢和辞典を見ると、しばしば字源が示されていて、この字は「艸」と音を表す「刑」からなる形声文字だと分かります。その説を述べた漢代の字書『説文解字』の篆書体も出ていて、古くは上部にある「艸」が「刑」

ディクテーション漢文

(巣鴨中学校・高等学校教諭)

酒井雅巳さかい まさみ

昨年度、九年ぶりに中学一年生の担任となり、これを機にもう一度生徒と一緒に英語を一から勉強しようと決意しました。なぜこの意欲を学生時代に持てなかったのだろうと後悔しつつも、段々と本格的に英語を勉強したくなり、TOEICに向けて勉強し始めました。

私が学生だったウン十年前と違い、今やスマートフォンとイヤホンがあれば、いつでもどこでも本格的に英語が勉強できる時代です。アプリも充実していて、リスニングはもちろん、ディクテーション（読み上げられる英語を聞き取ること）もスマートフォン内で完結でき、学生時代との違いにとっても驚いています。

ディクテーションを毎日こなしていると、だんだんと英語に対する理解力が深まっています。それにしがつて、もしかしたら漢文でもディクテーションの効果があるのではないかと思うようになりました。そこで、漢文をディクテーションする

授業を考案してみました。

古文や漢文は、音読を繰り返すことで理解力が深まることを多くの先生が感じているはず。一方、音読だけではなかなか古文や漢文の面白さを伝えられないとも感じているのではないだろうか。

しかし、デジタル機器を用いて生徒一人一人が自分のペースで漢文をディクテーションすることができれば、教員の負担を増やすことなく、音読の魅力を最大限に生徒に伝えることができるのではないかと考えました。

現在、多くの学校で生徒が一人一台パソコンやタブレットを持っています。録音したデータを配布することで、自分のペースでディクテーションができ、かつこちらが何度も読み上げる必要がないという利点があります。このことで、生徒は自分のペースで集中力を切らすことなく、ディクテーションをすることができ、漢文に対する理解力が深まります。

『ディクテーション漢文 授業内容』

(中学二年生での授業を想定しています)

- ① スマホの録音アプリなどを使用して読文を録音する。

・録音する教材は、短いものであれば、『論語』などの一文や漢詩、長いものに挑戦する場合は、「矛盾」や「蛇足」

「五十歩百歩」などが取り組みやすい。
・正確に書き取りできるように、エクセルなどで1マス1マス書き取れるプリントを用意すると、書き取りしやすい。

- ② 録音したデータをGoogle classroomなどで配布する。

・データを各生徒のパソコンに配布することで、自分のペースでディクテーションできる。

- ③ 録音されたものを聞きながら、訓読文をディクテーションする。

・最初は書き下し文としてそのまま書き取る。できるようになれば、訓読文を聞きながら、白文に返り点をつけることにも挑戦してみる。

- ④ 正確に書き取れているか確認する。

・模範解答を配布し、自己採点をする。
100点満点の減点方式で、ゲーム感覚で得点を競わせると盛り上がる。

二〇二四年度大学入学共通テスト

「国語」 漢文の分析と指導

きたざわ こういち
北澤 紘一
(代々木ゼミナール)

概要

二〇二四年度大学入学共通テスト「国語」漢文は、唐の杜牧^{ぼく}の【詩】「華清宮」とそれに関連する【資料】Ⅰ～Ⅲ（蔡正孫^{さいせうそん}『詩林広記』所収）・【資料】Ⅳ（程大昌^{ていだいしょう}『考古編』所収）からの出題である。杜牧は、字を牧^{ぼく}之、号を樊川^{はんせん}といい、中国晩唐を代表する詩人である。七言絶句を得意とし、「華清宮」のほか、江南の景色を写實的に詠んだ「江南春」、項羽の烏江での最期を詠んだ「題烏江亭」（故事成語「捲土重來」の語源）等が有名である。【資料】は、後世「華清宮」に付けられた注釈であり、『詩林広記』『考古編』どちらも、『四庫全書』に収められている。『詩林広記』巻六では、【資料】ⅡとⅢの順番が逆であり、Ⅱ（『疊山詩話』の末尾から「如之何不亡」（之^{これ}を如何^{いかん}ぞ亡^{ほろ}びざらん）、Ⅲ（『遜齋閑覽』の末尾から「詞意雖美而失事実」（詞意美なりと雖も事実を失ふ）という部分が省略されている。また、『考古編』巻八には、【資料】Ⅳの前に、【資料】Ⅲの見解が紹介されている

が、本文では省略されている。設問の都合による改変であると考えられる。

二年ぶりに漢詩が出題された。これで二〇二〇年度センタ―試験、二一・二二・二四年度共通テストと、五年間で四回の漢詩出題である。本文の字数は【詩】が題を含めて三十一字、【資料】Ⅰが三七字、Ⅱが二四字、Ⅲが四八字、Ⅳが四八字で、前年度より四字減少した。設問数は六問（前年度七問）、マーク数は八箇所（前年度九箇所）で、前年度より減少した。複数問題文は、共通テストの特徴であるが、【資料】は【詩】の注釈であり、読み易いものばかりである。問5で【資料】ⅢとⅣとの関係を問う説明問題が出されたが、大意が取れていれば解答できる。問題文が複数あるからといって、特別な読み方をする必要はない。漢字・語句の意味、白文の読み方といった定番問題のほか、前出問5、問4【資料】をふまえた【詩】句の解釈、問6【資料】をふまえた【詩】の鑑賞が問われた。これらは共通テスト本試において新傾向の問題といえる。二三年度まで毎年出題された空欄補充問題は

出題されなかった。問題文の長さ・内容、設問で問われている知識・内容・難易度は入試漢文として標準的である。(注)が丁寧で、【資料】が読み易かった分、過去三年度に比べて受験生にとって取り組み易かったものと思われる。

設問の解説

問1 漢詩の形式と押韻を問う問題

【詩】の形式と押韻箇所を問う問題である。二二年度問4以来の、漢詩のルールを直接問う問題であった。【詩】は一句が七文字、全四句の七言絶句である。七言詩は原則として第一句末+偶数句末で押韻するが、第一句末は踏み落としの可能性があるので、念のために確認しておこう。漢字の音読みの母音部分で判断すればよい。起句末「堆」ㄉㄞ・承句末「開」ㄎㄞ・結句末「来」ㄌㄞは、すべて母音部分がㄞになっている(転句末は「笑」ㄒㄠ)。正解は選択肢⑤「形式は七言絶句であり、『堆』『開』『来』で押韻している。」漢文既修者の正答率が高い問題であった。

問2 (ア)「百姓」・(イ)「膾炙人口」・(ウ)「因」の意味問題

二二年度の漢字、二三年度の漢字・語句の意味問題に続いての出題である。今回は漢字・語句に加えて、故事成語の知識も求められている。

(ア)「百姓」は、「ひやくせい」と読み、「人民・民衆」とい

う意味の重要語句である。漢文では、「農民」に限定されないことに注意が必要である。①「民衆」が正解。選択肢に「農民」がなかったためか、正答率は高かった。(イ)「膾炙人口」は、「じんこうくわいしや」と読む。味の良い膾や炙り肉がよく人の口のにぼることから、「人々の間に広く知れわたる」ことをいう故事成語である。④「広く知れわたっている」が正解。【資料】Ⅰ・Ⅱの内容から、①「異口同音に批判する」⑤「人々が苦痛に感じている」を選ぶ受験生が多く、正答率の低い問題となった。(ウ)「因」は、「よりて(よつて)」と読み、「そこで・そのために・それによって」等と訳す接続語である。前の内容と緊密に関わって後の内容が引き起こされることを表す。①「そのために」が正解。正答率の極めて高い問題であった。

問3 傍線部の返り点と書き下し文との組合せ問題

センター試験以来の白文傍線部問題の定番形式である。これまで正答率の低い難問が出題されてきたが、今年度は誤答選択肢がまったく文意の通じないものばかりであり、例年に比べて正答率が高かった。なお、選択肢上段の返り点は、下段の書き下し文に合わせて付けられており、ずれるはない。

傍線部後半に「所」が含まれている。漢文中の「所」の多くは、「所^{スル}」のように下の語から返って読み、「―すること／もの」等と訳す。この段階で「所不顧」を「顧みざる

第4問 次の文章は、唐の詩人白居易（八二一～八五〇）の詩「華清宮」に關連する資料Ⅰ～Ⅳである。これを読んで、後の問い問うるに答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたことがある。（配点 20）

【詩】

華清宮

長安回望繡成堆，
山頂千門次第開。

一騎紅塵妃子笑，
無人知處荔枝來。



多くの門や御殿が並ぶ華清宮の全景

【資料】

Ⅰ 『天寶遺事』云「貴妃嗜荔枝，當時涪州致貢，以馬羣馳載。」

七日七夜至京，人馬多斃於路，百姓苦之。

Ⅱ 『臺山詩話』云「明皇致遠物，以悅婦人，窮人力，絕人命，有所不顧。」

Ⅲ 『通志』云「杜牧『華清宮詩』尤勝矣。人口撫『唐紀』明皇以十月幸驪山，至春即還宮，是未嘗六月在驪山也。然荔枝盛暑方熟。」

（註）資料Ⅰは『通志』詩話に記される。

Ⅳ 甘沢謠曰「天寶十四年六月一日，貴妃誕辰，賜幸驪山。」

命小部音聲奏樂，長生殿進新曲，未有名會南海獻荔枝因名荔枝香。」

（資料Ⅳは『新唐書』高宗本紀による）

所」と読めている選択肢②④に絞ることができる。また、「所」直前の「有」も、普通「有」の「有」のように下の語から返って読む。②「有れども顧みざる所なり」は誤り。④「人力を窮め人命を絶つも、顧みざる所ありと」が正解である。

共通テスト開始以来、白文問題において、「有」も「所」も（追試を含め）すでに三回目の登場である。白文問題では、句形を構成しない頻出漢字を重視していると言えるよう。

問4 【資料】Ⅰ・Ⅱをふまえた【詩】第三句の解釈問題

解釈問題は毎年出題されている。ただし、この問題は【資料】をふまえた【詩】の解釈であることに特徴がある。「早馬」「砂煙」「それを見て楊貴妃は笑う」は全選択肢共通であり、実質的には【資料】Ⅰ・Ⅱの内容理解が求められている。

【資料】Ⅱに「明皇致遠物以悦婦人」とあり、選択肢①「玄宗のため楊貴妃が」は主客が逆である。Ⅰに「涪州致貢以馬通」とあり、②「産地へと走りゆく」が誤り。「産地から運んでくる」のである。Ⅰに「人馬多斃於路」とあるが、③「宮殿の門の直前で倒れ」るわけではない。⑤「玄宗に取り入りたい役人」はⅠにもⅡにも登場しない。正解は④「玄宗の命令で楊貴妃の好物の荔枝を運ぶ早馬が砂煙を上げ疾走して来る。それを見て楊貴妃は笑う。」漢文既修者の正答率は高かった。

問5 【資料】Ⅲ・Ⅳに関する説明問題

選択肢が長く、一見して共通部分が多いことに気がつく。こういった場合、選択肢間の食い違い部分に注目するとよい。選択肢前半には【資料】Ⅲは、玄宗一行が驪山に滞在した時期と荔枝が熟す時期との一致⇔不一致によって、【詩】の描写が事実と符合する⇔反することを指摘する」とある。Ⅲには「是未嘗六月在驪山也。然荔枝盛暑方熟」とあるので、「不一致」「事実と反する」としている③④⑤に絞ることができる。選択肢後半には【資料】Ⅳは、…【資料】Ⅲの見解を補足できる⇔反論する根拠となる」とある。Ⅳには「六月一日、貴妃誕辰、駕幸驪山」とあるので、玄宗や楊貴妃が六月に驪山華清宮に居たかどうかにおいて、Ⅲとは完全に対立している。【資料】Ⅲの見解を補足できる」とする③④は誤り。「反論する根拠となる」としている⑤が正解である。選択肢が長いいためか、正答率は低かった。

問6 【資料】をふまえた【詩】の鑑賞を問う問題

【詩】【資料】全体の内容理解を問う問題である。選択肢が長く、内容もバラバラである。選択肢中から本文にない／合わない箇所を探す消去法的なアプローチが有効である。

選択肢①には「事実無根の逸話」とあるが、事実無根とは言い切れない。③「驪山の山容や宮殿の門の配置：荔枝についても写実的に描写」は、【詩】にも【資料】にも見当たらない。

④「荔枝の希少性」については語られていない。⑤には「玄宗が楊貴妃とともに賞味する荔枝」とあるが、玄宗が荔枝を食べるかどうかは書かれていない。また、「二人が永遠の愛を誓ったことを賛美している」とあるが、「賛美している」とは言えない。正解は②。「不適切な手段で運ばれる荔枝」とあるのは、本来公文書の緊急輸送に用いる馬通で荔枝を運んだことを言っている。【資料】ⅢとⅣとが対立しているのも、「事実かどうか不明な部分がある」も適当である。

予想と対策

今後複数の問題文が提示されるものと考えられる。また、漢詩が出題される可能性が高い。ただし、問題文が複数あるからといって、特別な読み方・解き方が必要になるわけではない。設問は、形式・内容・難易度にわたり入試漢文として標準的である。知識で即答できる問題は取りこぼしたくない。漢文に由来しわが国の言語文化を形成する漢字・語句・定型表現(句形)・漢詩・故事成語の正確な知識の習得、漢字の読み・意味にとどまらない用法にまで踏み込んだ正しい理解(「有」「所」「以」等)が重要である。二五年度から「国語」に大問が一題追加されるにもかかわらず、時間は一〇分しか延長されない。そのため、漢文においてもより速く読解することが求められる。今後は速読の訓練も指導に取り入れたい。

後藤淳一 編著

『はじめての漢詩作り入門』

B5判変型・並製・八八頁・
定価＝二二〇円（税込） 大修館書店

本書は、全くの初心者を対象に、「漢詩をまずは一首作ってみる」ということに目標を絞った手引書である。分量としては九十頁弱の比較的薄めの本であるが、内容は少しも妥協していない。「練習問題」が設けられているのが本書の特徴の一つであるが、それを解きながら第1章から第3章まで学び進めていけば、自ずと規則に則った七言絶句、即ち、李白や杜甫に見せても通用する作品が作れる、その第一歩を踏み出せるように「課程」が組まれている。

編著者の後藤淳一氏は三十年以上にわたり、故石川岳堂（忠久）先生の指導を受け、現在は大学や市民講座など、漢詩作り指導の第一線で活躍中の存在であり、その添削指導の的確さには定評がある。

本書は六つの章から成る。第1章では、漢詩とは「漢文」＝「昔の中国語」で作るもの、という当然の事実を踏まえ、大本と

なる漢文の基本を、文法中心に学ぶ。ここで見落とす点として「和習」を避ける重要性が指摘される。例えば「若」という字には、本来、「わかい」という意味はなく、「わかい」の意で使うと「和習」となる、など。なお、「和習」については第6章に多くの誤りやすい事例が掲載してあり便利である。

第2章では、平仄、押韻、二四不同、二六対など、七言絶句の規則を学ぶ。これらの規則は、五言絶句や律詩にも共通する基本的に重要な規則である。最初は聊か煩雑に感ぜられるかもしれないが、一度、覚えれば、どうということは無くなるであろう。（規則が無かったら却って難しい。）第3章で七言絶句の実作に入る。言うまでもなく、七言絶句は四句からなるが、まずは最初の一句（七字）を作ることから始める。うまく一句出来たら、これを結句に据え、次に転句、更に起承の二句へと進み、

一首を完成させる（七言絶句は後ろから作っていくのが鉄則）。但し、それで終わらせず、「推敲」して磨きをかける。一旦は良く出来たと思った作品でも、改めて見直すと往々にして規則上の問題点や不適切な表現が見つかるものである。明らかな瑕疵ではないにしても、より良い表現が見つかる場合もある。そのやり方までが、具体的に即して説明されている。

第4章では、第3章までに修得した知識を踏まえ、『漢詩創作のための詩語集』（大修館書店）等を使った執筆者の実作例が紹介される。詩題選びから推敲まで、自作する際の参考として大いに役立つであろう。（本章は中嶋愛氏執筆）

第5章では、前章までとは少々趣を変え、「韻塞ぎ」「柏梁体」などが取り上げられる。これらは遊び感覚で楽しめるもので、特に中学や高校の生徒を対象にした教育の場などで漢詩に興味を持たせるのに好適な「実践案」として提案されている。（本章は岡本利昭氏執筆）

第6章は資料集である。漢詩の基本用語解説、漢詩歳時記、要注意の和習、韻字一覧、平仄早見表、七言絶句の平仄式など、充実している。（堀口育男・茨城大学教授）

川合康三 著

『偏愛的漢詩雜記帖』

近刊

そもそも『偏愛的漢詩雜記帖』とは、随分風変わりな命名である。漢詩の愛好者はだいたい古典主義者であり、どつしりと安定した世界を求めている。そこに向けて「偏愛」をぶつけてくる。著者はそれを百も承知の上で、敢えて漢詩の自由な読み方の可能性を提示する。それは、漢詩の魅力をたくさんの人に知ってもらおうとする著者一流の希望表明のようにも見える。

収録作品は古い方から、『詩経』・後漢の「古詩十九首」、魏の曹操・曹丕、南朝の陸凱・陶淵明、唐の王維・李白・高適・杜甫・韓愈・孟郊・李賀・白居易・劉禹錫・李商隱、南宋の陸游、明末の高啓、清末の黃仲則・龔自珍、最後は日本の禪僧から一休となっており、有名どころをバランス良く網羅している。

全部で三八項目、偏愛の対象となる詩のほか関連の詩句や詩人が幅広く取り上げら

Now
Printing

れているので、繰り上げられる世界は結構大きい。ある意味、漢詩をめぐる話題はほぼこの一冊の中に尽くされている。漢詩をこれから読む人も、むしろすでに読み慣れている人にこそ、本書は興味深く刺激的であろう。

収録項目数では、杜甫が六項目で最多、四項目が李白、三項目が白居易・李商隱・陸游。陸游は、今の日本の知名度はともかく約一万首の詩を作った南宋最大の詩人である。その点、李商隱に三項目さいたあたり著者の「偏愛」が顔をのぞかせている。また韓愈の親友で、身過ぎ世過ぎが拙なかつた孟郊にも偏愛を寄せている。曰く「ここに取りあげる孟郊（七五一―八一四）、この人はあまり知られず、訳注もでないけれど、ぜひとも読んでいただきたい一人。日本人がふつうにいだく漢詩のイメージとはずいぶんかけ離れているのだから。

〔中略〕その肉体に閉ざされた、とがった氷片のような心。なんとも暗く、冷たく、鋭い。こうして著者の偏愛に導かれて、読者は孟郊と出会い、中国古典文学の間口の広さを理解することになる。著者の語る偏愛とは、漢詩についてのこれまでの常識、つまり思い込みを風穴を開ける方法のことである。

この本は、中国名詩選と名付けられるような作品本位の訳注書とは違う。主眼はあくまでも、著者の漢詩に対する考えを述べることにある。だから作品全体に執着せず、さわりの部分だけが取り上げられることも多い。本書にはそうした思い切りの良さがあり、結果として、普通は取り上げにくい長篇も自在に扱うことになる。とはいえ一部分を取り上げた詩も、著者一流の濃密な言葉に誘われて、嫌いなさを感じることもなく、十分に文学を味わうことができる。

著者の川合康三氏には専門家相手の著作も少なくないが（近刊『中国の詩学』研文出版など）、本書には著者の漢詩に対する年来の思いと考えが、最も分かりやすい形で見事に凝縮されている。漢詩の愛好者であれば、まずは手に取るべき書物であろう。

（松原朗・専修大学）